生花の手引
全

序

古來我國の風習として諸般の事物に秘事とするもの甚だ多し、殊に藝術技術に關するものに至つては尚更らに然り、之れ自家の尊權を保ち、名聲を維持する點に於て自衞上此に出でたるものならんも然も一面より飜つて之れを見るに夫れが爲め其道に遊ばんとする者の意を阻止すると夥しく延いて其發達を充分に得せしめざる因を爲すや勿論なり。而して我が花道の如きも由來一箇の技術にして又た美藝に屬し斯道を汲むの流派今は岐れて二百有餘に出づと雖も何れも古來の因習に則り曰く初傳、曰く秘傳、曰く奥秘等の墻壁を設けて其門戸を叩くものあるも容易に之れを窺はしめざるは獨り學ぶものゝ遺憾とする處なるのみならず、又之れが隆興を企圖するもの、遺憾に絕えざる處たり、而

已其深秘として秘する處、若くは内斯道の階段より進歩たる者のみに至つては益々之れを公開し以て初心者の指針に供え其技の上達を補導すべきは先輩者の義務にして皆又た斯道の爲めに忠實なる行爲と信ず。即ち此點に於て我れ〳〵微才此に鑑る處あり數名相計つて既往究め得たる諸項より其極秘とする處に亘つて苟も初心者の資とするに足るものを悉く披瀝し筆を執つて漸く稿を終へたるは本編なり。故に本編は啻に初心者の資たり得るにとゞまらず斯道に多年志す人たりとも時に或は備忘たり得べく又門外の者は之れによつて以て花道の精神を窺ひ得るや論なし。今や本編の上梓に際し其意のある處を記して序に代ゆと爾云。

梅花香ふ南窓に當して

花道研究會代表者

野華庵貢畝記

凡例

一、編者は露骨に曰ふ、生花は獨習すべく又た獨習すべからざる技術なり、然も何等の因も無く何等の素も無きものにして僅かに一卷の書を師とし其技の堪能を得んとするは到底及ぶべきもあらず、書を師とせば其道を究め得べけんも其技を究むること覺束なし。

一、依て本編は敢て斯道の獨習書とは云はず、要は道しるべなり參考書なり、花は如何にして學ぶべきや、花は如何にして生くべきや、難花は如何に處置すべきや等、花道に於ける初心者の疑義を逐一に從來諸流に於て秘せる處を忌憚なく採選することに努めたり故に強ち獨習書と云はずとも斯道に多少の意のある人ならば完全なる獨習書たり得べし。

一、從來刊行せる此種の書中秘事に亘るものは單に口傳と書して其要を得ざるを屢々見る、之れ所謂因習に則る宗匠の亞流にして著者の行ふ甚だ忠實を缺くものと云

ふべし。本編は其口傳たるものゝ内容をも述べることゝしたり。

一、本書の編纂に當り編者は自己の修めたる處を緯とし古人先輩の書を經とし以て其粹を採り雜を省き之れに都下に於ける諸流宗匠の説を挾みて纔に稿を終へたりと雖も編者の技倆未だ凡を超えず、竊かに書中或は其意の及ばざるものあらんを恐る、世の識者に望む、幸に之れ等を認むるあらば指導を垂るゝに吝ならざることを編者は愼んで其意を體し再版の時を待つて訂補すべし。

尚本書の編纂に就いて指導を與へられし各宗匠、殊に至大の援助を給はりし嵯峨御所派生流の師範花江都澤村彦甫先生の指導を受くる處甚だ多し今や上梓に方り茲に錄して深く謝意を表す。

編　者　識

生花の手引附投入盛花目次（水揚秘傳法）

第一編　生花

○目次

第二編　投入花

第三編　盛花

第四編 水揚

目次終

生花十徳

交はるに貴賤無く　常に他念なし
語らずして獨樂み　草木の名を知る
衆人に愛敬され　席上常に香しく
朝暮風流にして　諸惡にはなれ
精神を養ふ事深く　神佛を崇敬す

生花の手引

附投入盛花（水揚秘傳法）

花道研究會編

第壹編　生花

生花の種類と其濫觴

何事にも種類のあるやうに花道、即ち生花にもいろ〳〵の種類はありますが、之れを大別しますと立華、流儀花、投入、茶花、盛花の五種であります、そして其濫觴としては之れも様々な説はありますが之れを大別致しますと流儀花の始まりと、夫れ以外の生花の始まりの二つであると云ふことが出來ます、即ち此の二つの紀元を述べて見ますと次ぎの通りであります。

生花の濫觴＝流儀花の始めは立華であります、立華は推古帝の御代、佛前に供へる花と

して印度から傳はつたのを、當時聖德太子が山城の國に一宇を建立して觀世音を安置し(現今の京都にある六角堂)小野妹子入道專務と云ふ人に之れを守らせ、佛前に供へる爲めに此の立華の法を傳えましたのを、專務は其法に工夫を重ね一種の生け方を編み出したのが抑も流儀花としての初めでありまして爾來歲月を閱すると共に樣々の流派を産み出すことゝなつたのであります、そして專務の初めて編み出した流儀は其居る處を池の坊と稱へた爲めに流名を池の坊と名けることゝなりました、ですから流儀花の最初は池の坊でありまして池の坊の起りは立華である譯であります、と斯ふ云へば池の坊は我國で最古の生花のやうに聞えますが、併し夫れ以前に花を切り取りて器物に插した例は無いではありません、即ち神代の頃、天神第七代の伊弉諾尊に榊を供えたり、紀伊の花窟に四時の花を以て神を祀つたり、或は大和率川社では三枝の花を酒瓶に插して供へたりした如きは之れも生花と見ることが出來ます、然も之れ等の插し方は流儀花のやうに技巧を以てすることは無く、只だ切り取つて自然のまゝ插したのは勿論でありますから夫れを以て強ち斷言をするのではありませんが、彼の投入の如き

茶花の如き、盛花の如き、何れも自然體に重きを措く生花は其創始の時代は新古の如何に拘はらず此の系統をうけたものであると云ふことが出來る道理でありませう、尤も此の事について詳しく説けばいろ〳〵と云ふべきことはありますけれども、流儀花を主とした本章では餘談になりますから夫れは別の項に讓つて先づ流儀花に就いてのみ述べることゝ致します。

生花の法と型

事には法があり法があれば必ず形の添ふのは當然のことであります、然も法のあるものゝ其法に適はねば延いて其形も整はぬものでありますが、殊に生花に於ては最も其法に重きをおかねばなりません、語を換えて云へば生花としての生命は其法にあるのであります、如何に麗はしい花葉も其法に背き其形の整はぬものは生花として推賞する價値の無いものであります、ですから其何流を志すにしても花道を修めやうとするには先づ其法から究めるの要があります、即ち以下生花を説くに方つて其法たり形から

說明をして見ませう。

生花の法＝生花の法とすべきは其生くべき精神であります、即ち地に生長した草木の形は自然でありますが、單に自然と云ふだけて形の整ふたものとは申しません、之れを人體に譬へたなれば飾り氣の無い赤裸々の姿であります、如何に自然を尊ぶにした處で赤裸々を以て人に接しては禮を失しる如く、草木に於ても之れを花瓶に挿し其美を賞しやうとするには夫れ相當の姿を整へねばならぬのは當然のことであります、即ち生花の法とは其姿を整へるべき法でありまして之れを一言に云へば虚實の二文字に過ぎません、花を生けるには虚と實の二つを精神とするのであります、虚とは其形を整へて禮節を保たしめること、實とは所謂自然體のことでありますが、此の虚と實が相半して初めて生花たる資格が出來ることゝなります、約まり云へば草なり木なりを生けやうとするには半自然體を殘して半技巧を加へ、以て其形を調へる心が無くてはなりません、併し技巧を加へると云ふても無暗と手細工をやるべしと云ふ譯で無いのは勿論です、人が衣類を着用するのに袴は腰に、羽織は肩にすべく定つてあるやうに花に

加ふべき技巧にも一定の形があります、形とは次ぎに述べんとする花の型でありますから、虛實と云ふことを心得て其形によるべきは云ふまでもありません。

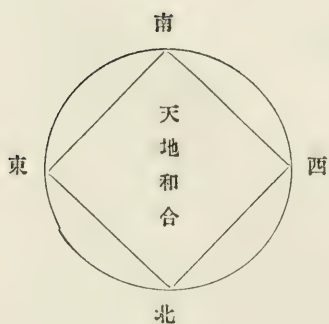
生花の型‖花の型として諸流を通じて最も重きをおかねばならぬのは天•地•人•の三才であります、尤も之れは流派によつて天•を躰•或は心•地•を留•或は相•人•を用•或は藏•とも云ふて居りますが、此の三才の起りは天地陰陽の和合を意味したもので地球圓體說の現代では當篏りかねますけれども天圓地方を和合して之れを縱横勾弦の形としたものを基としたのであります、即ち次ぎに圖によつて記して見ませう。

天圓

天は圓く

地方

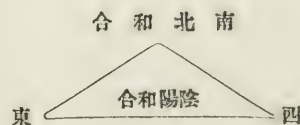
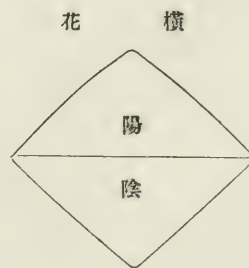
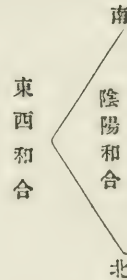
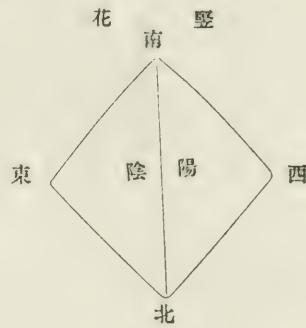
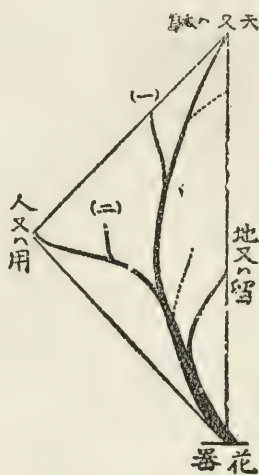
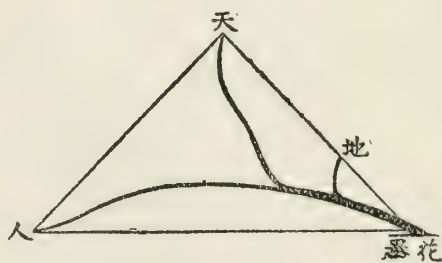
地は方形

南
東
天地和合
西
北

天圓地方とは天は圓きもの、地は方形なるものであると云ふ古說によつたものでありますが、其趣味を以て樂しむ花道ですから理屈ばつた說の當否は論じますまい、要は圖の通り花の本體は天地の合體と陰陽の和合でありまして陰陽兩極の氣の中和する處を人とし之れによつて天地人の三才を形造るものであると思ふて居れば宜しい、そして其三才を骨子として別に二つの添えを入れ、五備として初めて生花の型を造り得るのであります、即ち先づ三才の配置を圖によつて示して見ますと

生花の三才と五備

竪花

(一)と(二)とは添への枝でありまして、三才の枝に之れを加へて五備となるのです

横花

五備の外に右の圖點線の二枝が加はれば七行と云ふのですが、此の二技は必らずしも無くてはならぬ譯ではありません、生花としては其何流を問はず天地人の配置と五備の技が整ふて居れば夫れで宜しいのであります。

眞行草の事

三才の配置は前に述べた通りでありますが、其納むべき三角形に眞行草の三體あることも心得べきであります、即ち其三體の説に「眞は立つが如く、行は行が如く、草は走るが如し」と云ふておりますが之れを圖によつて示しますと、前の三才と五備の圖に記した竪花の圖は行の體横花の圖は草の體それから眞の體は下の圖に記した通りであります、此の圖を以て前に示した二つの圖と對照して御覧なさい殊更ら説明を加へるまでも無く其三様の體は自ら相違のあることは判ることゝ思ひます。

眞の花

花器

本勝手と逆勝手及び客位の花と主位の花

生花の本體は前に述べた通りでありますが、其型には本勝手と逆勝手の差別あること

を心得ねばなりません、そして本勝手と云ふのは前に述べた通り人の枝を左にして地を右に挿すのでありますが逆勝手は此の反對で人を右にして地を左にすることは下の圖の通りになるのです、之れも前の三才五備の圖と對照なさるが宜しい。

逆勝手　竪花

(天)
(人)
(地)

同上（横花）

(天)
(地)
(人)

處で此の本勝手に逆勝手の生け方は何う云ふ場合に差別が生じるかと申せば約まり生けた花を置くべき床の間と夫れから所謂「客位」として生くべき花と、主位として生くべき「花」の相違からでありますが先づ床の間の相違と云ふことに就いて述べて見ますと床の向つた方角によつて陰の床と陽の床の差別がありますから之れを殊更ら說明するよりも圖を以て示す方が判り易くありますから下に記して見ました即ち圖の○は陽の床▲は陰の床でありますから例して云へば北東

陰の床と陽の床

北
西　東
南

の隅から南を向いた床は陽、同西の隅で南向いた床は陰でありまして他は之れに準じて御判定なさい。

次ぎに客位の生花と主位の生花は何うかと申せば、客位とは主人が客を饗應する爲めに生ける花でありまして其床が陽なれば本勝手の花體、陰床なれば逆勝手の花體を以てするのであります、又主位の花とは客が懇望されて主人の爲めに生ける花、或は我が居間に挿して自分の目を樂む爲めに生ける花等を云ふもので之れは客位の花の反對に陽の床には逆勝手、陰の床には本勝手の花を生けることになつてあります。

型以外の花

何流に拘はらず生花の型としては以上述べた通り一定の形式を具備して居らねばなりませんが、併し枝の模樣により或は其恰好を取る上に於て必らずしも三角形、即ち鱗形の中に納めかねる場合があります、譬へて云へば地の花が天の枝から根締(花器の水際)に垂直に線を引く縦線を越えて右に出さねば恰好のとれぬ場合や又枝を切らねば

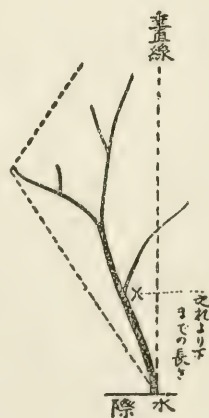
型に篏らず型に篏めやうとすれば宜い枝を切らねばならなんだり、或は蔓草のやうに一定の型に篏めかねるやうな場合などがありますが之れには次ぎのやうな心得を持つて居ればよろしい。

第一の場合　即ち垂直線を脱せねば恰好が取れぬと云ふのは申す迄も無く地●の枝でありますが之れには折返しと稱へて下圖に示した通り水際から×印のところまでの長さだけの枝を垂直線以外に出しても差支への無いことになつてあります譬へて云へば水際から×印まで三寸あれば三寸だけの枝を垂直線の外へ出しても差支への無い譯であります。

折返し

垂直線

之れより下までの長さ

水際

夫れから第二の場合　即ち斬り捨て難き枝や蔓草などの場合には流しと揃へて天地人の三體以外に一枝だけは線外に出ても差支へはありません、いや差支への無いばかりか反つて生花として妙味を發揮することが出來ます其枝の恰好は之れ又次ぎに圖

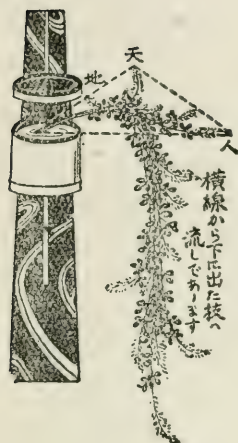
を以て示しましたから御覧なさい。

尚今一つ型以外の花として内用と云ふ生け方があります、之れは未生流などで時々見かけますが、内用とは用の枝、即ち人の枝は普通なれば三角の一方の尖端に向ふべきでありますのを夫れに向つて出さずに反對に内部、即ち垂直線の方へ向けて生ける生け方であります、尤も之れも參考の爲め圖を以て示して見ました……が併し流しと云ひ且つは此の内用などは、稍老熟した人の生くべきもので初學の人には試みぬが宜しい、兎も角も流しと内用の圖を擧げて見ますと次ぎの通りであります。

流しの例（其一）

流しの例（其二）

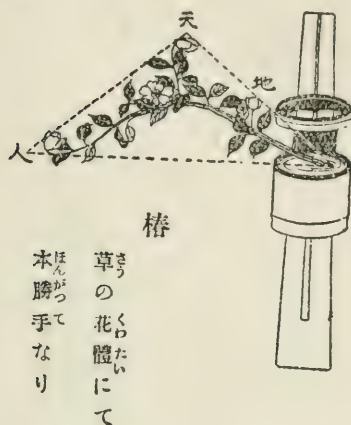
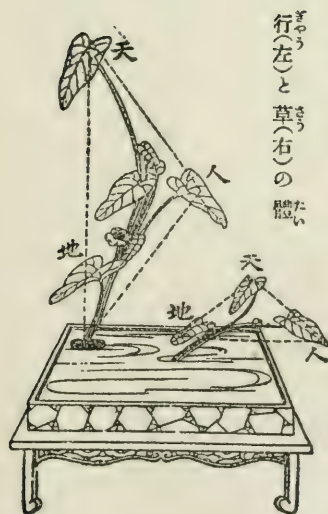
天
人
地
竪線から右に出た枝は流しであります

内用の例

普通ならば×印の處に置くべき人の枝を右に出し右に出すべき地の枝を左にしたり。

花體の例

何事を修めようとするにしても自ら究める外に故人或は先輩の成したものを多く見て自家の資とすべきは勿論でありますが、殊に花道にあつては尚更ら其要がありますから努めて諸所の生花を御覽なさい、そして可と認めたものに倣ひ、面白からずと思ふたものを避けるやう心掛けるが肝腎であります、即ち其例として花器に應ずる花體の一斑を次ぎに示して見ませう。

第一例

松

眞の花體にて逆勝手なり

地の枝の垂直線より出でたるは折返しなり

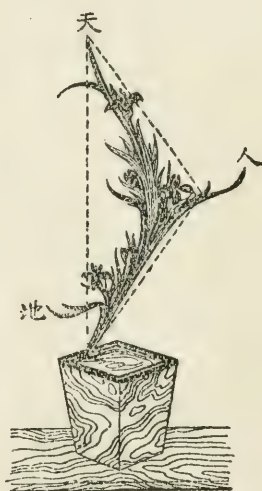
第二例

椿

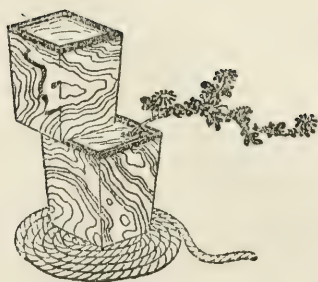
草の花體にて本勝手なり

第三例 河骨

行(左)と草(右)の體

第四例　あやめ

行の花體にて
逆勝手なり

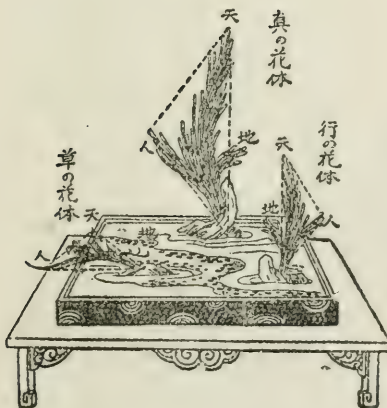
釣瓶は一對(二個)に生けるのは普通でありますが、一個の時には刎ね瓶釣と見て花臺には竹の簀を用ゆるが宜しい。

夫れから一對の場合にでも普通の花臺や薄板の類を用ひては面白くありませんから下圖に示した通り井戸綱を圓座のやうに丸く卷いて用ゐたなれば相應しいでせう。

第五例　（草の花體）下に垂れたるは流し

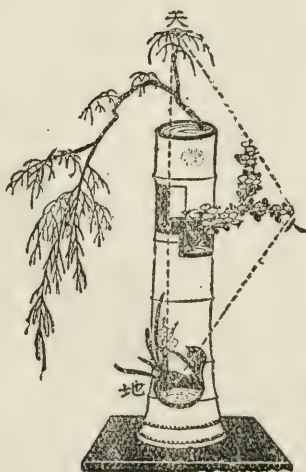
船の花器に生け方いろ〳〵あり、
項を改めて說く

第六例　水陸分　（眞行草）

木賊と杜若にて
木賊は陸
杜若は水なり

第七例

此の生け方は各其の體を備へたる外に三段を合して天地人の三才を備ふ

第八例

凡て手のある花器に挿す花は花葉の端は其手に觸れざるやう心掛くるを第一とす

以上は生花として主なる例を擧げたのであります、詳しく云へば際限はありませんが、

以上の例によつて花器に應じて趣を異にして居ることはお判りでありませう、が併し其趣を異にして居るとは云ふものゝ其體としては前に述べた通り三角形、即ち鱗形の範圍を脱せぬのは等しく同一であります。と之れだけ云へば生花としての體は殆んど述べた筈でありますから、然らば之れによつて花を生ければ間違ひは無いかと云ひますと、今一つ大切なことがあります、生花の體としては以上述べた通り備はつて居れば宜しいのではありますけれども、生花には忌むべき條項があります、如何に其體が備はつてゐやうとも此の條項に觸れたものは生花として實際の資格が無いことになる譯でありますから之れは是非に心得ておかねばなりません即ち次ぎに述べることゝしましたから篤と御覧なさい。

忌むべき事々

生花の忌べき事々は流儀によつて多少異にせんでもありませんが、併し假令甲の流儀に差支への無いことであらうとも乙の流儀に宜しく無いとしたものは矢張り避ける

方がよろしいですから他流に比して禁忌の比較的多い嵯峨未生流に傳へられて居る條項を擧げて全般に律することゝしました。

五穀　五穀は人命を繫ぐ大切なものでありますから之れは生花として決して使用すべきではありません。

名の知れぬ花　名も知らず其出生も判らぬ花を客席に使つては不可ません。

野菜の花　之れも客席に使つては客に對して禮を失することゝなります。

匂ひの強き花　之れも客席に控えねばなりません。

刺のある花　薔薇、鬼薊などのやうな刺あるものも客に對して失禮でありますが併し以上述べた四種は自分の書齋、或は其他自分の眺めとして樂しむ爲めであれば強ち惡いとは申しません、只だ客席に挿したり來客の目を悅ばせやうとする場合にのみ遠慮すべきであります。

見切　見切りとは枝と枝とがもつれて×のやうになつたものです、之れは各流を通じて絕對に不可ぬことゝなつてます。

指天枝　中から出てツネりなしに勢ひ強く上に伸びた枝でありますが之れも甚だ宜しくありません。

指地枝　前に述べた指天枝と反對で下を指した枝……は勿論活花としてあるべき筈ありませんが、假令枝先が勢ひ無く下に向つて垂れたのですら嫌ひます、尤も柳だの蔓草の如き垂れるべき天性のものは別として……。

指人枝　一に胸突枝とも稱へまして正面へ直に突き出た枝のことです、此の指人枝は客に對して無禮の枝とすら申す程であります。

掛物を指す枝　指人枝と反對に掛軸に向つて指した枝のことです之れも宜しくありませんから假令正面から見えずとも心得るが宜しい。

天蓋　天蓋とは讀んで字の通り上が笠のようになつたり或は花や枝が殘らず下向きとなつて恰ど上から蓋をするやうな形になつてをることであります之れは生花の方で嫌ふばかりでは無く見る方でも誠に不恰好であります。

丈くらべ　同じやうな長さの枝が二本揃ふて出てをることです。

兩差　見た處では恰ど左右の手を擴げたやうな形に枝の張り出たことであります、之れも甚だ不恰好なものです。

兩垂れ　之れは兩差に更らに御念の入つた枝で、恰ど左右の手を垂れたやうな形になつた枝でありますが之れとても誠に無恰好なものであります。

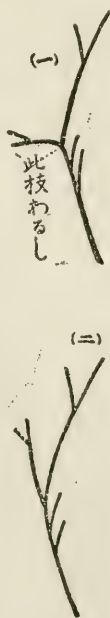
抱枝　兩の手を前に出して何物かを抱きかゝへたやうな樣の枝です。

花器差　花器の正面に枝葉が垂れ下つたことであります、だが嵯峨未生流では用の枝(即ち人。の枝)の流しが下に垂れたものは差支えが無いと云ことになつてあります。

弓箭　枝が下圖のやうに恰ど弓を射るやうな形になつてあることであります、即ち下圖の(一)は弓箭、(二)は差支への無い枝です、此の二つを對照して見ましたから圖によつて御覽になるがよろしい。

(一)
此枝わるし
(二)

窓　枝葉の都合によつて中を見透すやうな插し方であります。

片箒　一方が恰ど羽翼をひろげたやうな恰好になつた枝のことであります地の枝

或は人の枝などに時に此の片箒を拵へるものです。

捻枝　繩を綯ふたやうに見える枝のことであります、時には面白く見せると云ふ處から枯木に葛かつらなどを巻き付けたものがありますが之れも宜しくありません。

天蓋花　天蓋のことは前に述べましたが、天蓋花と云ふのは花が勢ひ無く横になつて憂ひを含んだやうに見えることです。

鏡花　流儀によつて釘隱しとも云ひますが、之れは花が眞正面に向いてをることであります。

理窟花　用ひる枝に太い細いの區別が無く何れも同じ太さのものを使つたことですが、之れは不可ません、生花とすべき枝は三味線の糸に見たてゝ躰の枝(天の枝)は一の糸に、用の枝(人の枝)は二の糸に、留の枝(地の枝)は三の糸と云ふ心持が無くてはなりません。

抱花　抱枝は前に述べましたが抱花とは花が向ひ合せとなつて挿したのを云ひます。

隱花　花器から三尺離れた正面から見て、花が葉や枝の爲めに遮られて見ることが出來かねるのを云ひます、因みに茲では問題外ですが序ながら申しておきます、花の體は花器から三尺離れて見て申し分が無ければ宜しいとしてあります。

段々花　花は枝々へ思ひ〳〵に咲いて居るので面白味があるのですが、段々花とは二輪三輪、或は夫れ以上の花が恰ど梯子のやうに段々となつてをることでありまして之れも甚だ見苦しいものです。

色切　花の色が二色あるのを一つの花器に挿すのに甲の色の花が乙の色の花と花の間へ挾まつてをることです、假令て云へば白い色の花が上下にある間へ赤い色の花が一輪ヒヨツコリと挾まることであります、約まり他の色の花で一方の花と花の色を切ることでありますが、若し數種取合すやうな場合は白、紫、黄、紅、赤と云ふ工合に上から順々にするが宜しい。

見え隱れ　前に述べた隱れ花と似て非なるもので主たる花或は葉が後の方に控えて見えず隱れず迷ふてをるやうな形であります。

禁忌花はザッと以上の通りでありますが、右の内で各流を通じて特に嫌ふものは露落し(天蓋です)、釘隠し(鏡花です)、向枝(指人枝です)、色切、丈け比べ、見切り、段々の七種でありますから之れ等は是非に心得ておくべきことであります。

色見切葉の秘傳

同じ花で色の違つたのを一の花器に生ける時には見切葉と稱へて何にまれ花の咲かぬ草木の大葉を其間に隔てゝ使ふのは通例の見切葉であります、處が譬へば紅の花ある草木と別種の紅の花ある草木とを取り合したり或は白き花のある草木と別種の白のある花とを取り合すなどは花道に於て好まぬ處でありますが、併し兩名の客から種類は變つても同じ色の花を送られた時に一方の花を生けて一方を生けなんだならば他の一方に對して無禮となりされぱと云ふて生くる爲めに態々送られたものを双方ともに用ひねば尚更ら以て兩名の好意を空しくすることゝなりますから生けない譯には參りません、けれども双方から送られたものを取り合すのは花道の掟に背くこ

とゝなると云ふやうな場合に兩全の方法と云ふべきは玆に云ふ色見切葉の挿方でありまして之れは各流とも奥儀の秘事として傳へられて居ります。

ところで其色見切葉の挿し方とは何んなものかと申しますと、今云ふ通り同色で種類の異にした花には花と花との間に花の咲かぬ葉を隔てることは通例の見切葉と同じことでありますが其隔てとする葉によつて雙方の花は先で行き合はぬやうに生け、そして根本は一處から出し葉を中へ包ませるやうにすることが肝腎であります、そして同じ色の花にしても草木は種類によつて位が違ひますから其内で位の高き花を眞に使ひ、次ぎなのを元に生けるのです、尤も此の挿し方は先づ眞となるべき花を入れ、次ぎに見切葉を挿し最後に位の下な花を葉から見越しに眞の根元から生ければ宜しい。

夜陰の花の心得

若し客の所望によつて夜陰に花を生ける時には開いた花を使はぬのが方式でありります、其代りに蕾を多くして半開のものを交ぜ、又は薬物などを生けるのは宜しい、だが見切

のよろしく無いことは禁忌の内にも述べてありますが、夜陰の生花には尚更ら無きやうに生けることが肝要であります。

草木挿し方の心得

以上述べたものゝ以外に更らに必要なことは草木の挿し方、即ち生け方であります、之れは花道に於て最も大切なことでありまして、各流では秘傳或は奥儀として居るものですが、假りにも生花として草木を手にする以上は是非に之れを心得ねばならぬことですから本編では前以て忌憚なく述べて見ますと次ぎの通りであります。

草木出生の事　之れは花を生けるに就いて第一に心得ねばならぬことであります、花を生けると云ふことは既に述べました通り、虚實、即ち自然と技巧を半して、本體を調へるのでありますが、自然を失はぬ以上は是非に其出生を訊さねばならぬのは勿論のことであります、高かるべき木を低く、低かるべき草を高く挿せば取りも直さず自然を失ふ譯でありまして所謂其出生を知らぬから起るものと云はねばなりません、のみな

らず一概に木は高く草は低しとは云ふものゝ木の内には灌木のやうな背丈の高からぬものもあれば強ち灌木で無くとも若木は草よりも低い道理でもあり旁た生くべき草木の出生を充分に調ぶべきは肝腎のことであります。

山、野、水、陸、發、生、地、の、差、別、　草木は凡て發生地に應じて其風姿を異にして居るのみでは無く、生け方に於ても夫れ〳〵趣を變へねばならぬのは當然のことでありますから、之れもよく〳〵考ふべきことであります、譬へて云へば深山幽谷に發生した草木と平野に發生したものと相違があれば、平野に發生した陸草と水中に發生した水草とも相違がありますですから之れ等を考へ合して山に發生したものに平野の發生したものを取合すには山のものを高く、又た陸草と水草を取合すには水草を低く挿すべきでありますが、之れに反して水草の下に陸草を挿したり、山野に發生した草木より高く平野のものを挿すなどは天地を轉倒した譯で決して當を得たものと、は申せません。殊に竹器の二重三重になつた花器に生けるには尚更らであります、即ち二重切のやうな二重となつた花器には上に木か陸草を挿し、下に水草を挿さねばなりません、又三重とな

つた花器なれば上に山のものを入れ、中に陸草を、下に水草を挿すか、或は山のもので無くとも木を上に、陸草を中に、水草を下にしても宜しい、それとも水草が無く單に木と草だけなれば上に喬木の類、中に灌木の類、下に草を入るべきであります、之れ等のことに種類を擧げて例を示せば中々複雜になりますから要は以上の出生と其種類と差別を深く噛みわけたならば自然と判る筈です、それから其挿した方の恰好については既に述べた通り先輩の生けた風姿を數多く見ることです。

枝の使ひ方や生けるに就いての心得は說かねば判りかねるにしても其體の風姿は實物に就いて多く見る方が會得の出來易いものであります。

花器と花　　花器のことは別に述べますが、併し之れを大別しますと筒形(壺形も含む)と据物の二つであります、そして本編で云ふ筒形とは背の高きもの、据物とは横に平たいものとしておきます、處で花の丈は各花器に應じるのは勿論でありまして、其度を失しると無恰好なものでありますから筒形の花器には其高さの二丈乃至二丈半の高さに又据物の花器には其左右の緣の差渡しの長さの三丈内外の高さに生けるのが普通

であります。

一花三葉　生くべき花數の比例を示したもので一輪の花大輪の花に三葉を扱ふ割合を以てすべきものであります。

生くべき枝數　生花として使ふ枝は前に述べた通り天地人三才の枝を主とし其他の枝は何れも添えでありますが、併し何本の添えを使ふにした處で其枝數を合して丁目となることを嫌ひますから三本、五本、七本、九本と云ふ風に奇數の枝數を使はねばなりません。

種類　草木の種類に就いては別段の制限はありませんが併し花道には諸流を通じて三木と云ふことを嫌ひます、三木とは木ばかり三種を生けることでありまして之れは絶對的に不可ませんですから三種の花枝を生けるには二種だけは木を使つて一種は草花を使ふとか、五種の場合は三種は木として二種は草花を雜へると云ふ風になさい。

草木取合せ　置花器に三種生ける時は天に使ふ草木のたけ假りに五尺あるものと

すれば人に使ふものは三尺より伸びざるもの、地に使ふものは一尺五寸より伸びざるものと云ふ心持で取合せるがよろしい、そして其取合すべきものゝ例を記して見ますと天に白梅か白梅擬、山茱萸、柳の類、人に百両金か赤椿か、地に葉牡丹、金丁花、萬年青の類又天に紅梅か楓、人に縞ばらん、小梅、地に藪柑子、蕗の塔、金錢花、或は天に白桃か木蓮、人に山吹か梢梅、地に芍薬の芽か、おだまき艸の類のやうに其他右に準じて色の見切等無いやう考へ五種も取合して挿すが宜しい、又据物等に株をわけて挿す時も同様でありま す、それから大廣口には草花ばかり九種も十一種も挿すことはありますが之れは初心の人には容易ではありません。

死花殘花のこと

之れも花を生けるに就いては是非に心得ておかねばならぬことであります、凡て普通の客席に生ける花は其當季々々の花か或は早咲の花を用ひるのをよしとしますが、死花又は殘花と云ふのは夫れ以外の花のことです、即ち死花と云ふのは季候外れの花の

ことで春の席上に冬の花を、夏の席上に春の花を、秋の席上に夏の花を、冬の席上に秋の花を生けること、又た殘花と云ふのは月後れの花のことで、一月に賞すべき花を二月か三月の席上に、二月の花を三月四月の席上に挿すことでありますが、共に自分の樂みとして眺めるのなれば兎も角、祝儀の席上は勿論客席に用ひぬがよろしい。

四季の生け方

草木の風姿が四季によつて眺めが違ふやうに、之れを生け花とするにしても春夏秋冬の季候によつて手加減をせねばなりません。と云ふて生花の本體は既に述べた通りでありますから之れを崩すことの出來ぬのは元よりでありますが茲に云ふ手加減とは使ふべき枝の花葉或は添えとすべき枝振りのことであります即ち之れを四季にわけて申して見ますと次ぎの通りです。

春の生花　春は草木の發生する時季でありますから、使ふべき枝葉は長けたる葉、或は枯葉を棄て（大抵の草木は新葉でありますが、喬木の類には古い葉があります）又新ら

しい葉にした處で成るべく青々としたものを用ひ生々として麗はしく生けねばなりません。

夏の生花　夏は草木繁茂の時季でありますから其態を忘れぬやう、且つ水際を涼しく生ける心掛けが肝腎であります。

秋の生花　秋は木の葉の散る時季でありますから枝葉は餘り茂からぬやう且つ閑靜なる心を以て生けるがよろしい。

冬の生花　冬は草木凋落して陽に返るべき時季でありますから水際を閑靜にして枝に勢ひを持たせる氣持が無くてはなりません。

以上は生花の全般を總括したものでありますが、併し草木の性質は種類によつて夫れ〳〵異にして居りますから其出生と花の本性を察して心すべきは勿論であります。

四季の足し水のこと

花を生ける際には先づ花器に五六分目の水を入れ、之れに然るべく花を生けて出來上

つた後に更らに應分の水を注すものでありますが、此の後から注す水を花道では注し水と云ふてをります、處が此の注し水も季候によつて其分量を異にして居りますから斯の道に志ず人は之れも心得ておかねばなりません、即ち次ぎに之れを述べて見ますと春と秋は草木のよく水を揚げる時季でありますから花器の九分目まで、又夏もよく水を揚げるのみでは無く蒸發の度も早く且つは水際を見せる爲めに十分に、それから冬は八分、極寒の頃は七分と心得てをれば宜しい。

此外生花と云ふことに就いてまだ〳〵述べることは澤山ありますが、以上の各章に記し來つたものは總括的のものばかりでありまして、區々に亙つたものは更らに項を逐ふて說くことゝし、次ぎには生花と密接の關係ある花器について說明をして見ませう。

花器の事

花を生けるには花瓶は元よりのこと、其他花留、配木を初め、鋏、小刀などのやうな器具の要るのは勿論でありますが、茲に云ふ花器とは單に花瓶のことであります。

處が花瓶と云ふた處でいろ〳〵と變つた形もあれば形に應じて名稱があり、且つ現今では新らしい形のものも出來ましたから餘り八釜しくは云ひませんが本來なれば生花と同じく眞の花器、行の花器、草の花器の區別も出來てをります。此

（花器の圖）

の區別を概して云へば筒形は眞、筒形で變形なもの、譬へて云へば上部と下部の周圍の寸法が違つたり、筒形であつても周圍が方形であるやうに兎も角も眞の花器の形が稍、崩れたものは行、夫れから水盤や馬盥、据物等を初め平手の花器は草と思へば宜しい、即ち其一班を圖によつて示しましたから御覧なさい。

花器の種類

花器の形狀は前に其一班を記した通りでありますが、古來からいろ〳〵と變遷し其製作の材料も次第に多種多樣となつて現今に至つたものであります。尤も其變遷と云ふと聊か語弊はありますけれども、本來は生花の濫觴の項に述べた通り、立華の用具として使つたものでありますから眞の花器、即ち筒形の花器が根本で、爾來花道の漸く盛んになると共に其體を崩して行の形のものが出で、更らに進んで平物となり或は雅趣を保たしめる爲めに船、釣瓶、瓢、籠、竹器なんかゞ出來たものと見れば宜しい籠や竹器には深き由緒がありますから別に述べますが又夫れ〳〵寸法もありますが、特別に斯道の

趣味を持つた人か、或は特に製作をさす便宜の人なれば、兎も角、夫れで無くば規則通りの寸法を云ふた處で夫れに適合したものを得られることは容易ではありませず、又た其各流に於ても現今では格別之れを選ぶやうなことは無い有樣ですから茲には申しますまい。

夫れから之れに使つた材料も最初は青銅のやうな金屬と青磁のやうな陶器に限られてあつたのですが、之れも其變遷？と共に次第に諸種の材料を以て製せられるやうになつたのであります。

以上各種の花器の扱ひ方及び其他のことに就いては以下各項に分けて説明をすることゝしました。

青磁の花器扱ひ方

青磁の花器は前にも述べた通り最も古く、立華の花瓶として天竺から渡來したのが初めてゞありますから凡て青磁の花器は現今でも天竺から渡來したものであると云ひ

傳へて居ります、そして此の花器の性質は濕りのあるものとして花道では露を打つことを嫌ひます。

竹器の扱ひ方

竹器は現今では中々種類が澤山ありますが、其初めは秀吉が北條攻めの際、隨行を命せられた千利休が陣中の無聊を慰める爲め、豆州韮山の竹を切つて拵へたのに基因し其後斯道の好者或は諸流の宗匠達がいろ〳〵と意を凝し好みによつて寸法を改めなどして今日に傳はつたものであります、處が此の竹器を扱ふに特に注意をせねばならぬのは金屬性や陶器製と違ひ乾濕の如何によつて龜裂が生じたりハゼ破れる憂ひがあります、ですから使ふに先つて充分に水に浸し、水氣を吸はした上で切口を拭ひ其上で花を生けねばなりません、それから序ながら云ふておきますが花を生けるについても裏表を定めることであります、凡て竹の表とすべき方は椽の內でも厚味のある方で有ますから其方を正面に向けるのは心得ごとゝ云はねばなりません。

籠の花器扱ひ方

籠の花器は龐居士と云ふ人の作つたのが始めであります、夫れを東山義政が見て風雅なのを愛で、床の間に据えやうとしたのを居士は賤しい翁の造つたものであるからと拒みましたけれども義政は苦しからずと云ひましたが尚も辭退をすると然らば花臺なりとも用ひんとのことに翁は花臺は床を表するものであれば尚以て勿體なしと固辭しました、ですが夫れでも許されなんだために翁は恐れ入つて更に丹精を凝し製作したものを献上に及んだと云ふ話があります、ですから之れに因んで籠花生には花臺や薄板(花臺、薄板のことは後段に述べます)を使はぬことになつてをります、尤も現今では流派が澤山出來たにつれて法式も次第に崩れ中には花臺を用ひる流儀も出來ましたが、由來は右云ふ通りの有樣ですから使はぬのが本來です。

それから現今では其籠の種類もいろ〳〵出來ましたが、紘のあるのは靈照女と云ひます、之れは龐居士の娘靈照の作つたものであります、そして此紘のある籠に花を生ける

心得としては枝の端が其弦に掛らぬやうせねばなりません、之れは弦は云はゞ持つべき籠の手でありますから其手に花體が觸れては宜しくないと云ふのに基因します。

釣瓶の花器扱ひ方

釣瓶は千利休が庭前の井の釣瓶に朝顔の纒ひて麗はしく咲いたのを、眺め夫れに倣へて花器としたのが始めだと云ふことであります。と斯ふ云へば甚だ手輕い花器のやうに聞えますが、如何にも本體が手輕いだけ方式においていろ〳〵の故實がありますと云ふのは座敷の内で花器を置くべき場所が正座であるべきに反し、釣瓶は元來上座に置くべき器物で無いのですから云はゞ積極と消極の調和を計らねばならぬ譯であります……いや、上座に置くべからざるものを美化して釣合を取るべき必要がありますです、ですから花器の内でも釣瓶は最も扱ひ惡いものと云ふても宜しい即ち之れが故實として傳へられて居るところを次ぎに述べて見ますと。

▲**釣瓶の種類**　釣瓶には塗物のもの、木地なりのもの、され板のもの等の種類があり

ます、そして夫れに綱の添える時には塗釣瓶には眞紅の紐、木なりの釣瓶には皷の調緒、又され板の釣瓶には蕨繩か或は棕梠繩を用ひるのが方式であります、尤も此他に銀或は鐵などの鎖を用ひることはありますが用ひ方によれば雅趣を缺く憂ひが無いとも申せません、それから釣瓶としては一對即ち二個用ひるのは本來でありますけれども一つ釣瓶の生け方もあります。

▲**一つ釣瓶**　一つ釣瓶を使ふには時には釣ることもありますが置物とするのが本體であります、そして釣る時に用ひる花は大抵蔓草でありますが置物とするには何花でも差支へはありません、と云ふて木よりも草の方がよろしい其草の内にも水草は最も相應してをります、尚念の爲めに申しておくのは釣瓶のやうに周圍の方形(平物は別です)の花器は特別の場合を除くの外は凡て角を正面とするのが普通であります。

▲**對の釣瓶**　一つ釣瓶を略式とすれば對の釣瓶は本來とも云ふべきでせう、いや、略式本式よりも由來釣瓶の花器は生花を主としたものでは無く、夏季の涼味を表はし花によつて雅致を保たしめると云ふのが始めの趣旨であつたのですから之れに生くべ

き花は重々しいのは宜しくありません、然も現今でも流儀によつては夏時に用ゆべき花器として居るほどです、と云ふて夫れは僅かに一小部分で、大勢は四季を通じて用ひることゝなつてありますから差支へはありませんが、併し其用ひ方と花の入れ方は時季によつて多少の區別がありますから豫め心得ておかねばなりますまい。

尤も其區別を云ふに先つて花器の使ひ方から述べますと、花器中で此の釣瓶の花器ほど使ひ方の多様にあるものはありません、然も各流の流派〳〵によつて夫れ〳〵用ひ方の名が違ひますが、大別をすると置いて生けると釣つて生けるの二通りであります、處で置いて生けるには二つを決して並べては不可ません、元來釣瓶の性質としては一方が上なれば一方が下に居るべき筈のものですから置くとすれば必らず重ねるか(段として重ねるので几帳面に重ねるのではありません)或は一箇を下に置けば一方を然るべき臺を設けて一段高い處に乘せるかです、又釣るとしても一方は高く一方は下にすべきは勿論です、尤も此の高低の度合は流儀〳〵によつて多少の相違はありますが、之れも時季によつて趣が違ひます、即ち春と夏なれば上にすべき釣瓶の底から床疊ま

での間を二尺二三寸、秋と冬なれば三尺内外をあけ、下の釣瓶も釣るとすれば床疊は釣瓶の高さだけの間をあけたなればよろしい、又、置くとすれば床疊と別に隔てるには及びませんが併し普通の花器のやうに花臺は用ひません、其代りに竹の簀か青石か但しは碁石を島形にして其上へ載せるのです、それも前に述べた一つ釣瓶のやうに角を正面とし、上の釣瓶は横を正面とするにしても手は正面から見て一文字になるやうに釣るのが本式であります、夫れから花は夏季なれば下だけに止めて上の釣瓶へは水を湛へるだけでよろしい、又夏季以外には上下ともに花を入れてもよろしいが併し上の釣瓶には蔓草のやうな垂れたものを入れ、下には勢ひの強い枝のものを入れるやう心掛けるがよろしい。序ながら嵯峨未生で釣瓶七種として定められた生け方がありますから參考の爲めに述べて見ますと。

▲**苔清水のつるべ**　落かけの定座(普通釣瓶の釣るべき位置で釣船も同じことです)へ一瓶をかけ、今一つは床の眞中に置くのです、そして露切り(置く釣瓶の下)へは美くしい小石(碁石を扱ふてもよろし)を敷き、之れに生ける花は置釣瓶を賞花とするのですか

ら釣る方へは垂れ物を入れるがよろしい、そして釣つた方は横面を向け、置いた方は角を正面とすることは前に述べた通りであります。

▲朝露のつるべ　二重の置釣瓶であります、生くべき花は二重切の生け方に準じてよろしい、そして露切りには花臺、薄板などを用ひず編竹の筏、簀のやうなものを用ひます、尤も之れに入れる花は上の瓶は和らかに下は競ひて生ける心持で生けるのであります。

▲板井の釣瓶　此の生け方は一瓶を床の花生釘に掛け、一瓶は床の陰の座へ置くのでありますが花は涼しみのあるやうに生くべきです、尤も此の賞花は上の瓶にあるのですから其心持を以て生けるがよろしい、また下に置くべき瓶の露切りには小石或は編竹何れにてもよろしく、或は繩を圓座のやうに卷いて其上に瓶を置くのも面白いです。

▲筒井のつるべ　一に垂髪子のつるべと稱へて居る流儀もあります、此の生け方は重ね生でありまして上下の兩瓶には充分に水を湛へ、美はしい花を上の瓶にだけ生け

て下の釣瓶の水上に其影を映す趣を見せるのであります、此の露切りも前に述べたものに準ずるは勿論であります、重ねて申しますが釣瓶には普通の花臺や薄板を用ひるものではありません。

▲**競馬のつるべ**　普通の生け方と格が相違した花器の扱ひ方でありまして此の瓶は双方ともに釣ることゝなつてあります、釣ると掛けるは同意義でありますが双方ともに掛けると云ふ處から掛けくらべ、即ち競馬と名けたものだそうです、と云ふて同一の位置に掛けるのではありません一方(陽の瓶)は高く、今一方(陰の瓶)は一段低く釣る(約まり互ひ違ひに釣る)のが定法です、そして此の法は端午の節句に用ゆべきが本來ですから兩種の花あやめを双方に生けるべきですが夫れ以外の時には上の瓶には高く下には低く生けるものと嵯峨未生では申して居りますけれども、又た流儀によつては上に蔓物、下には少しく延びたものをと云ふてをるものもありますから之れ等は要するに生ける人の好みによつて何れともするが宜しいでせう。

▲**軒端のつるべ**　之れは一つ釣瓶に倣らへた生け方でありますから白竹を三尺五

寸の寸法に伐つて其端に鐶掛りの枝を少しく殘し、之れに瓶の鐶をかけ上には紫革か或は藤で輪を拵へてつけて釣るのですが、蔓物を生ける時は此の竹に纒はすのでありますが、尚此の竹の伐り方は節を半目に伐るのが方式であります。

▲宇治橋のつるべ　之れも一つ釣瓶の生け方であります、昔宇治橋の橋守通圓が宇治橋の橋上から水を汲んで居る折柄、利休翁が訪はれたので通圓は使つて居つた釣瓶の縄を其場で引き千切り、之れを早速の水注に用ひたので利休翁は其風流を甚く感賞して爾來其趣をうつし、宇治橋の釣瓶と名けて花瓶に用ひたのが始まりであると云ふことです、ですから此の生け方は釣瓶の鐶に短かく切つた縄を結でおくのが方式であります、そして生くべき花は餘りケバ〳〵しからぬ閑靜なものにすべきです、それから下の露切りは編竹青石などがよろしい。

瓢の花器と時候の心得

瓢の花器は風流を主とした草の花器ですから時候の嫌ひは無いやうではありますが、

併し事實は矢張り夫れを許しません、尤も自ら樂みとして用ひるものは仔細は無いとして客間には七月、八月、九月(勿論陰暦の)に限つて使ふもので其他は使ふべきものではありません。

舟の花器扱ひ方

船の花器は昔東山義政が琵琶湖上で土地の子供等が木片を以て舟に擬し之れに樣々な花を挿して水上に浮べ遊んで居るのを見て思ひ付かれたのが始めだと云ふことです、兎も角も其花器には木製、金屬製、竹製等ありますが何れも夏から秋へかけて用ひるものでありまして其他には使はぬことになつてをります。

處で其使ひ方には置船と釣船の二種ありまして釣船には出船、入船、碇り船等の扱ひ方がありますから之れも釣瓶と同樣心得が無くては用ひられません、尤も置船の方法は釣船に準ずべきでありますから玆には先づ釣船に就いて逃べて見ることゝしました。

釣船として釣るべき位置は流儀〳〵によつて多少異にしてはをりますが床の間に釣

るとならば床の上座と下座を見定め(上座下座とは申す迄も無く右左何れが床の上手であるか下手であるかと云ふことです)夫れを七三の割合として出船入船の入れ方に應じ頃合の天井から釣れば宜しい、又違ひ棚なれば上手の棚の眞ん中頃に釣のでありますが併し大體から云へば船と云ひ釣瓶と云ひ總じて釣花を用ひるのは明床か附書院或は餘興の場所としたものでありますから儀式の席上などに見合すべきは勿論であります。殊に沓舟に至つては尚更ら以て床に生くべきものではありません、床は貴人の席に象つたものでありますから沓舟に限らず凡て沓の形をしたものを置かぬやうになさい。

出船とは下座から上座に舳先を向け、前に述べた七三の割合の三分を下座に、七分を上座にあげて釣るのでありますが、此の出船の生け方は朝から晝までの花であります、そして花の體は鱗形、即ち草體とすべきが普通です、處で啻に出船に限らず凡て釣船に心得ておかねばならぬことは其の釣手の鎖と花の關係でありまして兎もすると花は此の鎖を見切たがるものでありますが(見切るとは枝が鎖より外に出ることです)釣手が

定法の寸法に足らぬ時は差支へ無いものとしては居りますけれども定法通りの釣手なれば斷じて許しません、尤も其定法の寸法とは艫の方の釣手を舳先まであてゝ見て恰どなれば即ち法通りの寸法、それより短かければ定法ではありませんですから生くべき花の枝葉によつて定法に適つた釣手を特に絞つて使ふこともあります。

入船は晝から晩までの花で其釣り方は出船の反對に舳先を下手に向け、釣るべき位置は下手へ七分上手へ三分をあけるのが定です、そして花の入れ方は出船と同様横鱗ではありますが、花器が反對に向くやうに花の體も又た反對にすべきは申すまでもありません、尙云ひ遅れましたが出船入船ともに枝の端を船より下に垂れるにしても充分に心せねばならぬと云ふのは花器に準じて船と云ふ心を飽までも持つのが順當であるからです、ですから上の花は帆に見立て垂れる枝は櫓とも楷とも見るべきやう生けるのは勿論ですが夫れを入れ方によつては碇となつて掛り舟になる譯であります。

掛り舟は碇を下して汐待をして居る形でありますから舟からたれる枝は碇綱と見て前の方に垂れ、其枝を艫の方へ流れる心を持つがよろしい。

泊り舟とは置船でありまして之れに生ける花は前にも述べた通り蔓草は用ひぬことになつてをりますから碇綱の代りとして舷側に碇を扱ふか、或は花臺の代りに碁石を敷くもよろしい、尚念の爲めに申しておきますが、掛り舟と泊り船とは夜の花として用ゆべきものであります。

船や前に述べた釣瓶のやうな釣るべき花器の位置と花の恰好を見定めるのは普通の花器と同様、床の框から三尺退つてすればよろしい。

二重三重切の花器に生ける心得

三重切りの花器に入るべき花の一端は前に「山野水陸發生地の差別」の項に述べましたが、それは草木の種別に就いてだけでありましたから茲に二重切り及び三重切りの花器に生くべき花の體を參考として申して見ますと。

二重切りに生くべき花は上口には立姿(眞の體)を、下口には横姿(草の體)を以てするのであります尤も之れは置花器としての場合でありまして、掛けて使ふ時には上に横姿、下

に立姿を入れます、之れも上口に木、下口に草であるのは申すまでもありません、それから上口の人の枝が下口の下の切口よりも下になつて居る時は下口に生けた花の天の枝は上口の上の切口より高く出すのが方式であります。

右述べた掛けて使ふ方式は正面掛の生け方でありますが床柱に掛ける際は花器の横から見るものとせねばなりません、ですから生け方にも自然差違の出來るのは當然のことでありまして之れには下口に大きな花は挿せませんから上口の花が假令充分に垂れ下つてあらふとも下口の花は別段高くするには及ばんのであります。

次ぎに三重切の花器は置くと掛けるに拘らず上口へは横姿の花を生けて明口の方へ出し、中口には立姿の花を、又下口へは横姿を生けて上が客位なれば中が主位下が又客位とすべきでありますが、併し之れでは同じ方向へ上と下の横姿が出る譯となりますから下口には大きな花を用ひることは出來ませんのみでは無く花器によつては事實に於て大きな花の納まりかねることもありますから、そんな場合には上の横姿が客位とすれば中は正面へ出して扱ひ體に小じまりに生け下に大きく立姿を客位に生ける

と面白く見られるものです、倘此の形からいろ〳〵と變化をして樣々な生方となるものですがそれは一に花器と手練を待たねばなりませんから初心者には容易ではありません。

二管筒に山里水

山里水とは草木の出生、即ち山に發生するもの、野に發生するもの、水に發生するものゝことでありまして、三重切の花器に之れを生ける方法に就いては「山野水陸發生地の差別」の項に述べた通りでありますから又もや改めて述べるには及びますまい、處が花器に二管筒と云ふのがあります、二管筒とは長短の筒が並んだ花器でありますが、之れに山里水の三種を生けるには長い筒には木と水草にあらぬ草を入れ、短かい筒には水草のみを生くべきであります、世には長筒に木のみを入れ短筒に陸草、水草を取り雜ぜて入れるやうな人も無いとも申せませんが、之れは諸流ともに挿さぬことですから心得ておくがよろしい。

二重切りに山里の松

二重切りの上下双方の口に松を生けるのでありますが、之れは峰の松と麓の松を生けわけるのですから殊更ら説明をするまでも無く要は生ける人の心持次第でありますだが之れを強て云へば上に生くべきは遠山の松、下は麓の松として枝に何處となく遠近の情を保たしめるのであります。

家下の花生け方

幹が短かくて生けて根元の見えぬのを家下の花と云ひますが、之れは砂鉢か馬盥の花器を用ひ、水陸をわけて花の形は只だ天地人の三才のみにとゞめ、根本は岩石で留めればよろしい。

花器四季の心得

自ら樂む爲めに用ひるものは兎も角、客席に用ひる花器は季節に應じて夫れ〲取り變はねばならぬことは諸流ともに稱へられて居る處であります、然も流儀〲によつて多少の相違あるのは元より免れぬ處ではありますが其内一般的に亘つたものを述べて見ますと次ぎの通りであります。

春の花器　細口、中口、百度、

夏の花器　廣口、薄端、水盤、船、

秋の花器　薄端、船、土の中口、

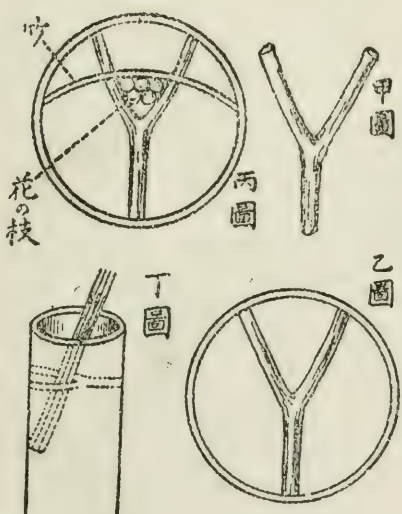
冬の花器　瓢、細口、百度、（籠は冬季に用ひず）

其他は四季通じて差支への無いものとなつて居ります、彼の釣瓶の如きも本來は夏季の部に屬する花器ではありますが其項に述べた通り現今では時候を嫌はぬ有樣ですから省きました。

配り木と花留の扱ひ方

配り木と花留めの何れかは生花に是非とも無くてはならぬものでありますが先づ配り木の扱ひ方から述べて見ますと次ぎの通りであります。

配り木とは筒形の花器に生ける花の根締を堅くする爲めに用ひるものでありますが、之れに使ふ材料は何にても粘り氣の強い木の椏を花器の口徑に應じ切つて嵌め込むのであります、尤も之れに用ゆるのは木槿のやうなものは最も宜しいですけれども所謂槿花一朝の榮云々の語句がありますから祝儀の花には木槿を使ふことを嫌ひます、然も祝儀、殊に婚禮の花、或は風當の強き場所などに生ける花は尙更ら丈夫に留めねばなりませんが夫れには配木の上を更らに細い竹で押えればよろしい、即ち圖の甲は配木、乙は配木を花器に嵌めし例、丙は夫れに花を入れ其上から細き竹で丈夫に押えし例の各鳥瞰

甲圖 乙圖 丙圖 丁圖 花の枝

圖丁は花器に入れた花の根締めと配木を示したものであります。

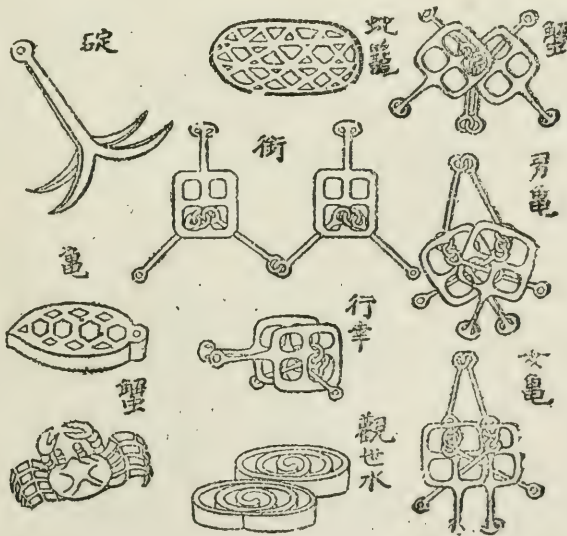
右は配木と其用ひ方の一班を示したに過ぎませんが、併し配木を入れるには少しく押し込むくらゐの加減で無くては花を留めることは出來ませんから花器によつては夫れが爲め毀をつけるやうなことが無いとも云はれません、ですから常々珍重して居る名器は勿論のこと塗物などには成るべく用ひぬ方がよろしい、若し是非とも使はねばならぬ場合は其小口へ目だゝぬやうに紙片か或は綿を挾むのであります。

尙云ひ忘れましたが配木の極の狹いものは「松葉くばり」又廣いものは「琴柱くばり」と云ひまして、太くない枝の多からぬ時には「松葉くばり」を、夫れの反對に太き枝を入れるか或は枝數の澤山な時には「琴柱くばり」を用ひるがよろしい、それから之れの使ふ位置は流儀によつて多少の相違はありますが、先づ水際から少しく下の方へ入れるのが普通であります。

又花留は配木の用ひかねる水盤、船、馬盥、砂鉢のやうな花器の挿す花の根締をする爲めに用ひるものでありまして是れには蛇籠、觀世水、碇盤、龜、轡、切炭、五德などありますが其

内切炭は別として其他は金屬或は瓦を以て製したもので花器及び花の種類によつて夫れ〱使ひ方があります、圖を以て先づ其様式を示して見ますと次ぎの通りであります。

右の外に切炭、五德などはありますが、それは殊更ら圖を以て示すまでも無く誰れしも知つて居る處でせうから省きました尤も以上の内でも轡は圖にも示した通り時に應じ或は生くる草木と見計らひ形狀を「行幸」「蟹」「男龜」「女龜」「双龜」「蟬」などゝいろ〱な組合せの仕方がありますけれども初心の人には殊更ら其必要はありません。

さて花留の使ひ方に就いて申しますなれば諸流とも殆んど變りはありません、と云ふて使ひ方其者に別に技巧を要するものと云

ふ譯で無いのは元よりであります、元來花留なるものは前にも述べた通り筒形の花器に配木を使ふやうに平盤の花器に於ける花の根締を固める爲めに用ひるものであります、平物の花器は筒形の花器と違つて口邊が非常に廣いものでありますから配木のやうなものを用ひることは出來ませず假りに用ひた所で淺くて口徑の廣いだけ中が見え透いて誠に見苦しい爲めに之れを用ひるのですが、之れを使ふにしても格別何うせねばならぬと云ふ規定はありません、只だ枝の根元を据ゐやうと思ふ箇所へ置けば宜しいと云ふて之れは花器に對する花留の使ひ方でありまして花と花留に就て聊か心得ねばならぬことがありますが夫れとても六かしい花則或は法則と云ふほど格別理窟張つたものでは無いのです、約まり云へば生くべき草木の出生と花留の形式に注意をすれば夫れで宜しい。早い例が水に棲むべき魚を籠に入れたり、籠で飼ふべき小鳥を水中に抑し入れるやうな愚をせねば宜しい譯であります、即ち此の主旨によつて花道に傳へられて居る處を次ぎに擧げて見ませう。

觀世水の花留は水草に用ゆべきものであります、若し之れを陸草に用ひる時は添えと

して花の根元から花器の縁まで蟹を置くが宜しい尤も置くべき蟹は二疋でありまして其内一個は上りたるやうに、一個は下りたるやうにするのです。

龜の花留も水草に用ゆべきものであります。

蛇籠の花留は水陸の双方……と云ふよりも寧ろ水邊の景色を表はすに用ゆるものであります。

蟹の花留は花留と云ふよりも寧ろ前に述べた通り添ねとして用ひる場合の方が多くあります。

碇の花留は船の花器にのみ限つて用ひることゝなつてあります。

轡の花留は水陸草ともに用ひて宜しいが、之れは組合して用ひるのは前に述べた通りであります。

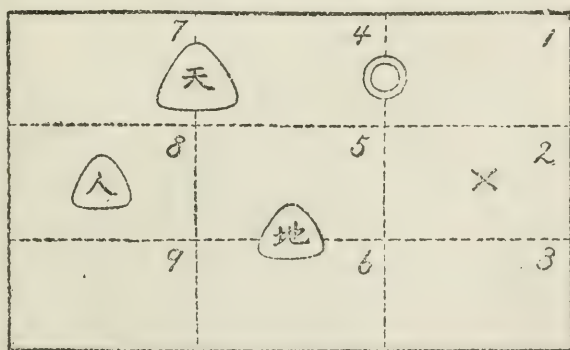
切炭……火鉢に入るべき普通の切炭でありますが炭は水をよく含むものでありますから鉢皿のやうな多くの水を入れ難い花器に使ひます、尤も之れに使ふべき切炭は何炭によろしいにしても皮のあるものを使はねばなりません、そして花以外に此の炭

の置工合によつて大に趣を見せるものでありますから使ふべき炭は一本では無く、二本或は三本を用ひて大小長短の差を拵へ、之れを然るべく配置して花は成るべく枝數を多く其間へ差すのであります。

五德……之れも火鉢に使ふ鐵の三ツ足のものでありますが、此の五德と云ひ切炭と云ひ共に火に因みのあるものですから場合により或は流儀によつて非常に嫌ふものですから成るべくなれば他の花留を用ひるがよろしい、兎もあれ右樣の次第ですから差支への無い流儀にあつても是非之れによらねばならぬ時の外は餘り多く用ひぬ有樣であります、而して是非に用ひねばならぬ場合とは何んなものかと云ひますれば先づ廣口の花器に大木でも挿すやうな時であります、根元の直徑一寸以上もあるやうな朴は普通の花留の穴には納まらず殊に夫れほどの朴とすれば枝葉の重りも相當にあります爲めに假令へ花留の穴に納まつた處で持ち應えて居ることは出來ませんから五德を使ひます、尤も五德は花器の端の方に挿す花の花留として使ふ場合は多くありますが其使ひ方は五德を花器の緣にかけて一本の足を緣の外に出し、挿すべき朴は緣の

内側(花器の中)になつた五徳の圓形の中へ入れるので朴にゆるみがあれば炭を栓として留めればよろしい、尤も此の場合五徳或は炭を隠くすために根締へ草花を扱ひます。

又花留の内でも砂留にする時には三才の石を飾らねばなりません、即ち三才の石とは下圖に示した通りでありますが之れは客位の置き方でありまして主位の時には天の石を右方の◎印の位置へ、人の石を同く×印の位置へ置き改め地の石だけは其儘でよろしい尚花器に對する石の置くべき位置を示す爲めに點線を以て花器の内部を假りに九つに分け、1 2 3の數字を以て説明をしますと、客位の置き方(下圖)では天の石は4と7の境界線上、5と8との境界線に近き箇所に、人の石は8の中央部に、地の石は5と6の境界線の中央に、置くのですが、主位の時には天の石を同じ位置の1と4の境界線上に人の石を2の

(天地人三才の石)

中央に置き改めれば宜しいのです。
以上は花留としての本體とも云ふべきですが其他に曲留めと云ふのがあります此の留方は鋏、文鎮、鎖、小柄、笄などを花留の代用として使ふ留め方であります、又木の根に石を扱ひ、水中に三分ほど入れて浮留とする仕方もありますが、儀式を重んじる生花の性質から云へば此種のものを用ゆべきではありますまい、ですから玆には斯んな留め方もあると云ふことだけを述べるにとゞめておきます。

花臺及び薄板と時候のこと

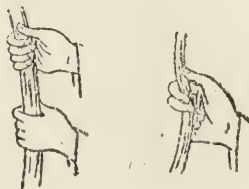
花臺と云ひ薄板と云ひ何れも花器の下に敷くべきものでありますが之れにも眞行草の區別もあれば又た時候に應じて用ひるものを變へねばなりません、先づ眞行草の區別から云ふて見ますと花臺は其高低によつて別れるのであります、即ち眞の花臺は高さ七寸二分、行は四寸八分、草は三寸六分と云ふのは本來でありまして冬至から春分までは眞の花臺を春分から夏至まで又秋分から冬至までは眞或は行とも二種の內何れ

かを夏至から秋分までは草の花臺を夫れ〳〵用ひる定めでありますが併し現今では花臺の寸法は區々になつて一定して居らぬやうであります。

次ぎに薄板の眞行草は四方面(四方の横手)の恰好によつて區分することになつてあります即ち横から見て一方落し［図］のものは眞の薄板、蛤落し［図］のものは行の薄板、又矢筈落し［図］のものは草の薄板でありまして之れ等を使ふ時節も花臺に準ずべきでありますが、之れは略式のものとして時季を問はぬ流儀もあります。

枝を撓る心得

生花の型は前からいろ〳〵と述べた通り一定の規矩はありますが、さて生花として生くべき草木と云へば自然のまゝでありますから其枝の恰好は千差萬別であります、然も此の千差萬別の枝を以て一定の型に嵌めねばならぬとすれば其恰好を改める必要はありますが、其改める方法と云へば枝を撓める外にはありません、枝を撓め恰好を正

し、そして花器に入るべきであります。然らば其撓めるのは何うすればよいか、何んな草木でも無暗と枝振りを正すことが出來るかと云へばそう旨くはゆくものではありません、人間にもいろ〳〵と性質があるやうに草木にも粘りの強い枝、脆くて折れ易い枝などがありますから等しく正すことが出來るにした處で約まりは手練次第でやらねばなりません、と云ふて初心の人には其手練からそも〳〵骨が折れるのですから最初は柳のやうな粘り氣のあるものを以て稽古をなさい、其撓め方は圖に示した通り太い枝は左の手を以て枝を握り、右の手で其上部(撓めやうと思ふ箇所をあけて)を摑み強く力を入れずにゆる〳〵と撓めるのです、又た細き枝或は草の類なればこれも圖に示した通り片手の指先で撮んで靜かに撓めればよろしい、又粘り氣の無い固い枝は撓めやうと思ふ箇所を湯をかけた布巾で卷いてゆる〳〵と力を加へたなれば撓めることが出來ますが其何れにしても初心の内は餘り急ぎ込んで枝を折つたり花や葉を落すことも無いと

は云へませんから充分の注意を以てするは勿論のこと、くれ〳〵も氣長く柔らかにと云ふことを忘れぬやうになさい。

生花のお稽古

以上書き記したことによつて花を生くるまでの心得は殆んど盡した筈ですから之れを會得された上はいよ〳〵實地についてお稽古をやつて御覽なさい、前に述べたことゝ聊か重複に亘る點もありますが其手順を約めて申して見ませう。

い生くべき場所と生花　花を生ける以前に我が生くべき花は床に置くべきものか平座に飾るべきものか、但しは違へ棚に置くべきものであるか兎も角も其置くべき場所を定めることが肝要であります、と云ふのは前にも述べた通り花の生け方には眞行草の型があり、又た置くべき場所の廣いと狹いによつて夫れに相應すべき形を拵へねばならぬからであります、ですから夫れを見定めて床なれば本式によつて眞の花體に其他なれば行或は草の形にすべき心組を以てし、花の高さは花器に準すべきは勿論であ

りますけれども花器よりも其場所と釣合を取ることが第一です、場所と花の釣合の取れぬのは花器と花の釣合が取れぬよりもヨリ以上見苦しきものでありますからよく〳〵お考へになるが宜しい。

生くべき順序花器の仕度　花器花を初め其他入用の品を揃へたなれば先づ花器の仕度をせねばなりません、即ち花器が筒形なれば配木を花器の縁から六歩乃至一寸下げて嵌め、水を其處まで注せば宜しい、尤も配木の嵌めるべき位置は花器の長短に準ずべきは勿論であります、又平盤の花器なれば配木を用ひることは出來ませんから然るべき箇所へ花留を据えるのですが、水は夫れと共に注すか或は花を生け終つて注すかは流儀によつて夫れそれ相違がありますと云ふて平盤には水を後から注す方が生け易いですから初心の人は殊に先へ水を注して生ける事は考へものでせう、兎も角も之れで花器の仕度が出來ると次ぎに愈よ花の仕度にかゝらねばなりません。

花の入れ方　花器に挿すべき枝の順序は遠州流では天の枝より、池の坊では地の枝より未生流では人の枝よりと云ふ風に其他流儀によつて區々になつては居りますが

要するに天地人三才の枝を揃へて入れさへすればよいのですから何方が先になつたところで差支へは無いとして先づ其入れるに方つて枝を恰好に撓めねばなりません、諸流を通じて花を生くると云ふことに就ては根締が最も大切であります、三才五備の枝が遺憾なく整ふて居つたところで根締が緩んで居つては所謂體が崩れたことになるのですから枝數が何本あらふとも地の枝の岐れ際まで隙の無いやうキチンと揃ふて居らねばなりません、然も夫れを旨く揃はすと否とは撓め方の如何にあるのですから天地人何れの枝にせよ、最初に入るべき枝に恰好をつけ、後で入れる枝は夫れに倣つて撓めるやう心掛けなさい、そして枝數は前にも云ふた通り三才の外に五枝七枝九枝等奇數なれば何れほどでも差支へは無いのですから次第に添ふてゆけばよろしいが併し枝數を澤山に使ふは練習を重ねた上のことで、初心者は三枝の入れ方を充分に稽古するがよろしい。

足し水　花を生ける前に花器へ入れた水だけで生けた花を充分に養ふことが出來ませんから花を生け上た後に足し水をせねばなりません、いや、養ふ養はぬの問題では

無く此の足し水と云ふことは花道の方式になつてあるのですから是非とも必要ではありますが、併し之れを自分で注すのは自家の花器に入れる場合だけでありまして、若し他家で其主人から請はれて生けるやうな時は其家の主人に乞ふのを禮としてをります、尤も之れは其主人に水際を見て貰ふと云ふ意から起つたのですから生花の禮儀として一應は請ふものゝ若し主人が辭退をすれば前に述べた四季の足し水に準じて自分でお入れなさい。

尚念の爲めに云ふておきます、初心の間は美くしく咲いた花を剪り去るのは惜しい爲めにそれを殘して反つて體を崩す恐れがあるものですから、花も大切ではありますけれども三才の枝を整へるのが夫れ以上大切であると心掛けなさい、それから今一つ云ふておかねばならぬのは枝を撓めるまでに草木の裏表をよく〱見わけおくことです、裏表とは日蔭になつてをつた枝と日を受けて居る枝のことでありますが、之れは少しく心すれば誰れしも見わけることが出來ます即ち日を受けて發生した枝葉は何んとなく生々として茶褐色を帶びて居りますに引き代へ日蔭の方は其枝振に於て、葉の

色に於て弱々しい姿でありますそれで生花として用ひるには表の枝(日を受けてをつた枝)を正面とするのですから裏の方の枝(日蔭の枝)は悉皆拂ひ取つて仕舞ふがよろしい。

次ぎに今一つ愚念のやうではありますけれども花の入れ方の項で申し殘しましたから茲で補遺として改めて述べますが三才の枝を定めるには前項に述べた通り先づ裏枝を拂ひ取ると次ぎに三枝(茲には三本の枝を使ふことゝして申します)ともに下の切口から二握りほどの間の枝葉を拂ひ其內で枝のスラリと伸びて屈曲の比較的尠いのを天の枝とし夫れに次ぐべきものを人の枝に次ぎに曲りの尠い一本の枝を地とするのでありますかくして撰んだ枝を前に述べた通り然るべき恰好に撓めるのであります。

開花の時季と花の貯へ

書齋などに生けて自分の樂みとする花なれば兎も角來客の爲め殊に日時を定めた來

客の席に生ける花は前以て豫め用意もし、且つは恰ど其頃合を計つて花の開くやうにしたいものですが、之れには莟から花の開くまでの時期、或は花を貯へる方法を豫め知つておく必要があります、即ち花道の秘傳として傳へられてをるものを參考として摘錄して見ませう。

莟と花　花の開かぬものを莟と云ひますが此のツボミにも三通りがありまして其三期を過ぎて初めて花となるのであまりすそして其三通りとは最初は莟、それから蕾次ぎに蓓と云ふ順序でありまして莟とは蕚の爲めに固く包まれたもの、蕾とは蕚から漸く葩の表はれ出たるもの、蓓とは既に開かんとして未だ開くに至らぬものであります、處が之れ等の莟と云ひ蕾と云ひ蓓と云ひ花として見るやうになるまでに何れほどの日時を要するかと云ひますと大別して春と秋の二つにわけることが出來ます、尤も草木の種類によつて多少の相違は免がれぬにした處で春の花は莟となつても容易に開くものではありません、莟で久しく居つて次ぎに蕾となり、それから十日ばかりで蓓となり三日前後に開くと云ふ有樣ですが秋の花はこれに反して中々に速かです、今朝

の莟は晝頃には蕾となり夕刻には蓓となり翌朝には早くも咲いてをるものですから秋季に明日客來があると思へば前日に然るべき莟のある花を生けておけば恰ど客の來る頃には程よく咲くやうになるでせう。

花の貯へ　水揚其他のことは別に述べますから茲には云はぬとして明日生けやうと思ふ花を花園から切り取つたり或は花屋から求めても之れの貯へ方が不味ければ切角の花も萎まして仕舞ふ道理ですから之れも一通り心得おくべきでせう。

普通の貯へ樣　自園の花を切るのなれば早朝か日暮後にするが宜しい、凡て草木は日中に切るのは嫌ふものであります、それから明日生けやうとするのを一夜だけ貯へるのなれば別段に仔細はありません、其まゝ花桶に入れておけば大抵のものは水の揚るものです、或は夫れで覺束ないと思ふか但しは二日三日貯へやうとするのなれば根元を括つて井戸の中へ逆さに釣つておくのは一番手輕くて然も有効であります、殊に草花などは尚更らよく保つものです、又或說では花桶に入れて風のあたらぬ夜露の受ける處に置けばよいと云ひますが風の當らぬやうにして夜露を受けしめると云ふの

は随分六かしいことゝ思ひます。

特種の花　特種の花と云ふと可訝しいやうですが、これは普通で水の揚りかねる花のことです、其内にも竹は別に述べることゝして蓮、河骨なども其儘では充分保ち難いものですから此種の花は切り採る際の注意が肝要であります、先づ切らんと思ふ茎を見定め、切るべき箇所の少しく上の方を元結のやうな丈夫な細紐で強く引ッ括り、それから切れば別段水揚の方法をせずとも長く生氣を保つものです、尤も之れとても切るのは早朝か日暮後にするのは最も宜しいのは云ふまでもありません、尚其他のことに就いては水揚法の項に述べましたから夫れを御覧なさい。

一輪一葉のこと

一輪生は甚だ閑靜な花ですから茶席の花として多く用ひられ又其姿は至極無雑作なところから投入花の一種と云ふ人もありますが、併し投入花のことは兎も角、流儀花としての一輪生は諸流ともに秘事として居るだけで中々容易なものではありません、夫

れと云ふのは此の生け方は僅かな葉、僅かな花……然も牡丹や芍薬のやうな大輪のものは只だ一輪の花瓣中に五備を含ませねばならぬだけ六かしいのは當然のことでありますですから机上の一輪生の花器に無心で挿せば投入花と見て兎に角、流儀花としての一輪一葉は初心者に考へものであります。

尚序ながら此の一輪一葉について斯う云ふ説がありますから參考として書き拔いて見ます『珍花で一輪の花より無いときは格別のことで葉を扱ふて挿すべきであるが、本來なれば一枚の葉に一輪の花は咲くべきものでは無いのだから一花一葉は生くべきものでは無い、それから一花二葉、二花一葉、三花一葉の如きも不自然である』と、之れで見ると一輪一葉は珍花の以外には挿すことは出來ぬやうな譯でありますが、併し一輪一葉と云ふことは前にも述べた通り一流に秀でた人の挿すべきものでありますだけ流儀によつて其見解を異にし從つて諸説の區々になるのは當然のことゝ見て宜しい。

空瓶のこと

空瓶とは花を生けず花器のみを床に置くことでありますが、之れは仕儀によつては差支への無いことになつてをります、譬へて云へば掛軸に馬の繪があれば馬盥の花器に水のみを湛えたり掛軸に爛漫たる櫻花の圖か紅葉の圖があれば平盤の花器に水を湛へて其上に櫻の花を三五輪か或は紅葉の葉を浮べるのも面白いでせう、其他何んにまれ掛軸の圖と其花器を旨く調和さすとか、或は夏季には花の代りに何か趣向を凝して客に涼味を與えるか快感を覺えさす方法を執れば宜しい、それから今一つ空瓶で差支への無いのは月の會の席上とは貴人を迎へる時であります、又た花道に堪能なる客の來る時は花器に花を入れずに其側へ花盆に載せた花を置くのは禮儀であります。

客に生花を所望する心得と所望された客の心得

來客に生花を所望して承諾を得た時は春と秋なれば先づ花器に六七分目くらゐ、夏なれば八九分目、冬なれば六分目くらゐに水を注して床に据え、花盆に花を載せ、其側に小道具……鋏小刀、花巾(布巾のことです)配木(或は花留)水注を添えて床脇に持ち出し、其

客に挨拶をして此方に控えてをれば宜しい。
望まれた客は主人に一禮し、相客があれば相客にも一禮をして座を進め、先づ花器に對ふて配木を水際の邊に嵌め、次ぎに花を見立てた之で上座なれば床を左に見て花を生け終ると然るべき位置に直し、掛軸に障りなくば眞中に、若し構ふやうなれば軸先に滑らし、床の框から三尺ばかり退つてジッと花體を眺めて夫れでよくば主人に挨拶をして足水を請ふのです、其場合主人は足水を注さうと思へば座を進めて先づ水際を眺め、然るべく挨拶あつて水注の水を時季に應じて(足水の分量は前に述べた通りです)注ぎ終り、一禮して座を退りますと客は花巾をとつて先づ花臺を拭き、それから小道具を夫れ〱花盆に載せて以前の位置(床脇)へ靜かに置きますが、主人が足水を辭退した時は自ら水注を執つて行ふことは前に述べた通りであります。
主人は客が花盆を床脇に置かれる頃を計つて塵取と羽箒を持ち出で落ち散つた塵を掃入れて勝手の方へ持ち去り、次ぎに花盆をも運び入れて以前の座に戻ると客は軈て花を何うか御覽下されたい趣を述べます、すると主人は相客があれば先づ相客に先づ

譲るのは法ですが、若し相客が、何うかお先へと云へば一禮をして床前三尺のところまで進み出で、兩の手をついて天の枝から次第に下へ根締めまで見きわめて「誠に結構で御座います」とか然るべく賞美の挨拶をするのが方式であります。

以上は主人から生花を所望し、客は所望によつて生けたまゝでありますが、客は其家を辭して歸る際には自分の生けた花を何時までも床に据え置くは禮の無きわざであるとの意によつて花器のまゝ椽先か或は手水鉢の上へでも持ち出して歸るのが方式であります、又主人は夫れと見て何うか其儘にと挨拶すべきが禮儀でありますから、主人の此の挨拶があれば客は其儘にしておけばよろしい、主人の挨拶の無きに拘はらず床に置いて歸るのは禮儀の無いわけでありますから之れ等は主人たり客たる人の心得おくべきことでありませう。

上段の床に生ける心得

上段の床に花を生けるには始めに花臺を床の上の然るべき位置に据え、それから花器

は上段の間の框の際へ運び、次ぎに水注と花盆を下段に運びつけ、下段に座して生けるのであります、上段の間が何れほど廣くとも常の床と心得てよろしい、そして生け終れば靜かに花臺の上へ運び、足水を注ぎ花臺の上、床緣等を花巾でよく拭いて退ればよろしい。

卓下の花のこと

卓は大極の兩儀を開いた形でありまして暖は上り寒は下るものですから天とすべき卓上には火(香爐)を置き、地に象りたる卓下には水(花器)を置き、四方に柱あつて東西南北の方位を分ち、其中に生けた花は宇宙の間に初めて生れたものとするのであります、ですから之れを生けるには四方に障りなきやうにして陰陽の和合と虛實の當分を以て天地自然の形を表はすべきは云ふ迄もありません、處が之れに生けるべき花は上に香を焚きますから香氣の強きものは用ひぬことになつてゐます、それから花の種類も冬と春は白玉椿五葉、花は莟と開いたのを二輪、夏秋ならば中輪の菊の莟と開いたのとが二

輪か或は半開の花一輪に葉を五葉添えるが宜しい、又蘭の一花三葉か、水仙の一花三葉を用ひることもありますが卓下の花は元來華やかな生け方をしたり美々しい花を好みません、又香りの強い花も宜しくないことは前に述べた通りではありますが、若し用ひる塲合には上の香を遠慮すれば宜しい。

掛物に應ずべきこと

空瓶は掛物に應じて行つて宜しいことは前に述べた通りでありますが掛物に應じるのは強ち空瓶ばかりではありません、生くべき花の種類も掛物の畫に應じて酙酌すべきは勿論であります、即ち先づ第一に嫌ふべきは掛物に畫いた花と同じ花を生くることです、次ぎに畫で無くとも文字を以て表はした草木も不可ません、又た生くべき花の色が掛物の表装と同じ色ならば之れも見合すべきです、それから極彩色の畫のある掛物に對しては白き花か但しは葉物を生けるやうなさい、人物の圖ならば床前から三尺退つて見て其顏に掛らぬやうに生くべきです、又掛物の落欵を隱れぬやう生けること

に心掛けなさいと是れだけは掛物の書畫或は表装に對しての心得べきことですが更らに掛物全體に對しての生花として心得ねばならぬことは一幅の掛物の時は花の爲めに其記した書畫を見切らぬやうにして中央へ一瓶生けるのが本來でありますそれとも對の花器を以て掛物の左右に置くことゝすれば申し分はありません、又掛物が二幅對の場合には之れも同様、一瓶なれば二幅の中央に、二瓶なれば一幅づつの前へ、それから三幅對の時は掛物と掛物の間へ一瓶づつ凡て二瓶、五幅對なれば二對の花器を以て間々へ凡て四瓶生けるのが方式であります。

徳相貧相閑靜のこと

人相に福徳圓滿の相や貧弱の相があるやうに花にも生け方によつて見榮えのするものと見劣りのするものがありますが、其花姿によつて徳相、貧相或は閑靜等に岐れるのであります、先づ

徳相の花　とは何んなものかと云へば其生け方は萬枝に障りなく、ぬんなりとして

勢ひあり、人の枝に滿開の花を使ひ、天の枝は人に準じて半開きの花を用ひ、地の枝には莟をつかふて總體に花の多く開いた趣あるやうに見せるのであります、次ぎに貧相の花　とは生けあげた花の姿に優かな氣風は無く只だ勢ひの強ひ枝を心もこめず淋しく挿し入れたもので見たところでは恰で𩮗い嶮山を眺めるやうで少しも趣も無ければ面白味も無い花であります、夫れから閑靜な花　は貧相の花と似て非なるもので枝はしほらしくフラ〳〵と出て居る處に何處となく強味あり、花葉を多く使はずに枝を柔らかに撓め、然も其撓め口は自然に曲りたるやうに見えて風流に生けた花でありますが、之れ等の三相を考へ合せて其席により德相に或は閑靜に生けるとも貧相の花にならぬやう心かけるがよろしい。

皮肉骨の心得

皮、肉、骨とは生けたる花の姿を云ひますので、其頂、即ち天の枝の上は皮、それから中途どころは肉、根本は骨でありますそれで天の枝は渦に撓めて肉を充分に備へ、其肉で人の

格を兼ぬる心持が肝要とせねばなりません。

處で客位の花は陰から陽をさして出すものでありますから天の枝は陰に基いて右旋りに撓めますが主位の花は陽から陰をさすものですから陽に基く左旋りに撓むべきであります、尤も此の右旋りと云ひ左旋りと云ふのは天地寒暖の旋るところによるものであります故に、陰陽の花の挿方は自然の道理を備へたものと云はねばなりません。

根本の切り方

草花の根本は取りたてゝ云ふべきことではありませんが、木、其内にも太き枝の切り方には流儀によつていろ〳〵の説があるやうです、或流儀では生花は元來小刀を以てするものであるから根本の切口は例令鋸で挽き切るにしても小刀を使つたやうに斜に、切るべきものであると云ふて居りますと思へば他の流儀では生花は天地人を象り其性質正しかるべきものであるから花器の内に沒する箇所であらふとも平に正しく切るべきであると云ふやうに一定はして居りませんが、併し編者の考へるところでは要

するに何れとも便宜のよいやうに切りさへすれば斜だらふと平だらふと何方でも宜しくありますまいか、其内にも平盤の花器に生けるものは枝の使ひ方によつて据りのよいやうに、語を換えて云へば斜に挿す枝は水盤の底にピタリとあふやうに根本を斜に伐り、眞ッ直に立てる枝なれば根本を平に、五德留めとして縁につけて挿す枝なれば横に削ぐと云ふ風にするのは最も當を得たものと思はれます、又筒形の花器に生けるものなれば配水によつて留められるのですから別段深く詮索するにも及びますまい。と之れも元より著者一箇の私見に過ぎぬのですから果して當を得て居るか否やは確言は出來ません、たゞ序ながら茲に記して先輩諸氏の指導を仰ぎ、謬見とすれば本書再刻の時を俟つて訂補しませう。

正月の生花

正月の床には水仙、福壽草、梅などは無くてならぬものゝやうに置きますが、併し本床の生花としては何んと云ふても松竹梅の三種でありますと云ふて此の三種を一器に生

けるのではありません、三ヶ日にわけて元日には松、二日には竹、三日には梅と云ふやうに一日一種づつ生けるのです。

其内にも元日の松は一年の壽を集めると云ふ意を以て生けねばならんのでありますから特に心をこむべきは勿論であります、花器は云ふまでも無く花體と共に眞、それから生花には水揚が大切なは元よりとした處で元日の松は殊更ら葉色も麗はしく枝振も勢ひよくせねばなりませんから先づ其拵へ方から述べて見ますと。

先づ若松の長く伸びたのを穗先ばかり撰んで本の方の葉をムシリ取り、藁に土をつけて能く摺り洗へば奇麗になります、それから布海苔を成るだけ堅く煮て水漉しで漉し夫れを葉に塗つて藁で養へば葉が生々とするものですから其上で生けるのがよろしい、大體から云へば松の養ひに布海苔はよく利くものでありますから花器の水にも此の上汁を少しく注せば宜しい。

さて生くべき松の拵へが出來たなれば花器を型の通りにして先づ人の枝と其添えから入れます、此の始めに入れる人●は陽、それから添えは陰ですから陰陽の枝を入れるの

です、次ぎに天と其添えの枝を入れ、天人の二つが調へば今度は胎と稱へて葉をムシリ取り緑ばかり殘した枝を天と人の間に入れるのであります、地の枝は夫れ等を見定めた後で入れ更らに添えを入れますと枝數が凡て七本、それに五備の枝を揃へ、天地人三才の枝を調へると約まり七五三の入方となるのであります。

次ぎに二日の竹、三日の梅は普通の型によつて生ければ宜しいが其内竹の養ひ方は其方法によらねば水持の惡いものでありますから水揚の法は其項に記した方法を見ておやりなさい、尚念の爲めに申しておきますが、松と云ひ竹と云ひ自園のものを伐るのなれば早朝か日沒後にするがよろしい。

夫れから次ぎは七日の七草には用ひるべき花の種類は思ひ〳〵で一定はしませんが先づ白梅に七草中に二種ばかり扱つて生ければ宜しいでせう、尤も花器或は花の體は眞に越したことはありませんにしろ三ヶ日の花ほど格式をたてるには及びません。

神佛に供へる花

生花の濫觴は初めにも述べた通り神佛に供へたのが起因とも云ふべきですから神佛用の供花としては其體を整へるのは元よりとして夫れよりも使ふべき草木を撰ばねばなりません、其種類の選擇は後に述べた祝儀用の花に準ずるのは勿論でありますが先づ第一に枯枝、枯葉、虫喰葉、散り易き花、刺のある草木、それから前に述べた死花、殘葉などは絶對に使はぬやうなさい、尤も神前には古來からの供花となつて居る榊を供へるのは最も宜しいでせうが神前と佛前への相違は神前には成るべく靑葉を、佛花には色のある花を用ひる心掛けで供へるがよろしい、と云ふて何方も古例によるべきものですから西洋の草花などは成るべく見合す方が宜しいでせう。

佛事或は追善の花

同じ佛前に供へるにしても佛事或は追善の花は又異つてをります、殊に一周忌から七回忌までの佛事には色花は宜しくありません、其生け方は其花體を格別整へずとも宜しい、いや、反つて體を整へては宜しくありません、眞には枯木をつかひ、其下へ時季の花

を癖の無いやうにヌンナリ入れゝば宜しいのですが、今云ふ通り其花も色もので無い白い花を使ふのであります、そして十三回忌以上には色花を用ひ、それ以上年數の經つに從ひ純然たる生花として華やかに生けても差支へはありません、尤も之れに用ひる花も假令白色であらふとも死花殘花などの宜しくないのは元よりであります。

移徙の花

移徙に生ける花も注意をせねばなりません、と云ふのは凡て家宅の祝ひには火と云ふことを忌み嫌ふものですから況して移徙などには火に屬する赤き色のものは絕對に避けねばなりません、そして成るべく水に因みのあるものを用ゆべきです、ですから此點に於て二重切の花器の下口に水仙を生け、上口には水ばかり滿々と湛えるのも面白いでせう、尤も此の塲合は時季に拘はらず差支へはありません、其他移徙の花として多く使ふのは河骨、杜若、或は二重切の花器なれば下口に杜若、上口に白桃なんかも宜しい、其他葉蘭、茶等をも用ひます因みに下に水草を生ければ上に陸草を生けるのは普通で

ありますが、移徙の花は上下ともに水草を差しても差支へはありません。

新宅の花

之れも移徙の花に準ずべきであります、或古書に新宅の花として故人の生けた圖に鶴の花器の下口に芦を生け上口は只だ水のみを入れて澤邊の鶴に象つたのがありましたが之れなんかは祝意をこめた新宅の花として申し分の無い面白い趣向と云はねばなりません。

結納の花

結納に生ける花は花あやめか或は杜若の一色づつ生けるのが法式ではありますが併し之れ等の花は四時ともにある譯ではありませんから調ひ難き時には祝儀花に準じて目出たいものを選んで生ければ宜しい。

婚禮の花

婚禮には忌み花や嫌ひ花で無い限りは何を生けても差支へはありませんが矢張り松は最も宜しいでせう、尤も松花臺にも松を使ひますから重複するやうですけれども之れは差支へはありません、そして其松も相生生けと云ふて男松、女松の兩種を一對の花器に生けるのは本式であります、此の生け方は長の薄板を臺として一對の花器を並べ(花器は無論眞の花器です)右方の花器には男松を眞の體で陽の形に生け左方には女松を陰の形に生けるのですが其人の枝は男松の人の枝の下側に向ふやうに生けるのであります、そして應合ひは無くとも宜しいけれども若し挿すとなれば根本に白玉椿でも使へば宜しい、尚云ふ迄もありませんが双方の枝振は成るべく同じやうなのを用ひることです、餘りに變つたのは宜しくありません。 又之れを一瓶に生けるには前と同じやうな心持で男松を眞として女松を取り合すのですが女松の枝が男松の枝より高くならぬやうにすることが肝要です。

尚婚禮の席上には古來忌み言葉と云ふのがある通り、松以外に生ける花があれば其名稱に於て其出生に於て性質に於て充分に見究めた上で用ひることゝせねば不可ませ

ん、即ち祝儀の席上の忌花は次ぎに述べることゝしましたから夫れを御覧なさい、ですが、其他に紅葉の類芍薬などは誰れしも一見差支への無いやうに思ひますけれども婚禮の席では嫌ひますから御注意をなさい、又何種の草木に拘はらず殘花、死花は勿論のこと、枯枝、枯葉、破れ葉、別れ葉（八つ手や紅葉のやうに葉先の別れたるもの）折枝、散りやすき花葉、それから實のならぬ草木（山吹のやうな）なども絶對的に不可ません。

祝儀の席の忌花

祝儀の席上に生くべからざる花の一斑をいろは順によつて次ぎに擧げて見ますと

【い】の部では銀杏、糸すゝき、

【は】の部では薔薇、芭蕉、萩、濱荻、濱ゆふ、

【に】の部では接骨子、

【ほ】の部では木爪、鳳仙花、ほとゝぎす草、

【り】の部では龍膽、

【を、お】の部では尾車、鬼薊、荻、おしろひ、

【か】の部では河原撫子、苅萱、　【よ】の部では葭、

【た】の部では擅特花、　【れ】の部では連翹、

【つ】の部では躑躅、つはふき、つりがね草、

【な】の部では梨の花、菜の花、夏雪花、　【ら】の部では蘭、

【く】の部ではくちなしの花、

【や】の部ではやつ手、山百合、やまもゝ、山吹、

【ま】の部では蔓珠沙花、　【け】の部では罌子の花、

【ふ】の部では芙蓉、藤、　【こ】の部ではこぶしの花、午時花、

【て】の部では丁子、

【あ】の部では馬酔木の花、紫陽花、淡雪の花、朝顔、

【き】の部では桐の花、ぎぼし、　【ゆ】の部では百合、夕顔、

【み】の部ではみそ萩、みつまた、　【し】の部では石南花、紫蘭、

【ひ】の部では百日紅、　【も】の部では木蓮、

【せ】の部では仙翁花、剪春花、　【す】の部では蘇枋、李、菅、

其大要を記せばザッと此んなものです、尚其他のものも以上に似寄りのものは控へるがよろしい、要は其出生を正すことが第一です、と云ふて右は本格の祝儀に於ける忌花ですから中には略席に用ひて差支への無いものもあります。

産所の花

産婦の居間に生くべき花には濃厚な色彩あるもの、香氣の高いものは遠慮するがよろしい、ですが其内でも白梅のやうな氣品のあるものは差支へありません、其他殘花死花を初め嫌ひ花で無いものなれば何んにまれ高雅なものを用ひるがよろしい、或流儀では専ら青竹を生けるのがあります、如何にも之れなんかは至極適當のものであります。

送別會の花

送別會にも唯人の他國に行くのを送るのと軍人の門出を送るのと區別するが宜しい、唯人の送別會には柳を入れるのが普通であります、又た軍人を送るのには牡丹が宜しい、牡丹は一に名取草とも云ひますから出陣する軍人の特勳を祈るとの意に通じます、だが牡丹は四季を通じて得難いもので從つて調はぬ時には切り竹か根引きの松或は二つを取合して生けても宜しい、尤も松は古葉を取らぬものです、又他の草木を生けるとすれば殘花死花は元よりのこと枝の脆きもの、花の落ち易きもの(但し流儀によつて用ひませんが櫻は敷島の大和心を云々の歌によつて用ひて差支へません)破れ易き葉等のものは用ひぬやうになさい。

其他袴着の花、誕生の花、賀の祝ひの花等いろ〳〵ありますが約まる處は前に述べた忌花を除いて生けたならば夫れで宜しい。

それから三月の上巳の節句、五月の菖蒲の節句、七夕、八朔等を初め古來年中行事とする式日の花も上巳の節句は桃、菖蒲の節句は菖蒲か或は杜若なんかと定つては居りますものゝ餘り定つたものゝみを生けては面白くありませんから其時季〳〵に應じて然

るべく工風の上で生ける方が趣が深いでせう。

四季の草木扱ひ方

草木は種類により又季節によつて其扱ひ方に夫れ〴〵心得べきことがありますから之れも其大體を記して見ますと次ぎの通りであります。

▲梅　紅梅、白梅、單瓣、八重等の種類はありますが何れも古瓶に入れるがよろしい、そして白梅は閑寂に、紅梅は枝振を賑はしく生ける心持が肝要であります、尚總體に梅を撓めるには小枝が多くて骨の折れるものですから熱湯に翳すか或は熱湯に浸した花巾を卷いて撓めるがよろしい。

▲福壽草　卓下なれば兎も角、其他に主として生ける花ではありません、砂鉢の根添などに用ひることが多いのです。

▲春芽やなぎ。。。　春芽に限りませんが水邊を好む心持に生けるがよろしい、根添には水草が最も適しております。

▲連翹　置花には餘り用ひませんが掛花によろしい。

▲松　松は初心者には生け難きものとしてあります。

▲椿　掛花或は卓下などに生けますが置花には根添えの外にあまり使ひません、花は口裏に咲くものでありますから、葉配りを先にするのが至當です尙椿は花の落ち易いものとして席によりては嫌ふ流儀があります。

▲桃　初心者には用ひ惡き花であります、枝振が勢ひの强いものですから根添にやさしい草花を扱ふが宜しい。

▲櫻　花の散り易い爲めに流儀によつては用ひぬ花でありますが概して差支へはありません、枝は鋏を入れず折とつたまゝで生けるのが方式であります、花の散り易いものですから散つた花は薄板或は水盤なれば水上に浮しておくのが趣のあるものです、又彼岸櫻なれば花くばりに心を用ひなさい、尤も櫻には他の花を扱ふものではありません。

▲小米花　花器は竹器、殊に大口のものを用ひたなれば面白く見られる花でありま

す。

▲あやめ　出生をよくたゞして葉の自性に背かぬやう生けねばなりません。

▲躑躅　生花として餘り用ひられぬ花であります、流儀によつては嫌ふものですから心するがよろしい。

▲霧島　花器は壺或は銅の古瓶などに用ひると趣の深いものです。

▲海棠　初心者には生け惡き花ですが之れも銅の古瓶に入れるがよろしい扱ひとして他の花を使ひません。

▲山吹　置花よりも掛花か釣花とするがよろしい、花器は舟或は籠の類が適當です。

▲牡丹　花中の王と謳はれる花ですから一種生に限ります、生方は賑やかに生けねばなりませんが葉の透しを鮮かにすることが肝要であります、と云ふて元葉は取ることを嫌ひますから注意せねばなりません。

▲芍藥　之れも牡丹と格別の變りはありません。

▲紫陽花　色の變化する生ですから流儀によつて嫌ひますが併し婚禮等の席の外

は差支へはありません花は重くて垂れ易いものですから出生をよく考へて生くべきです。

▲百合　之れもうつむくのは自性ですから出生をよく考へて生くべきです。

▲桔梗　古瓶に入れるがよろしい、又澤桔梗は掛花とすべきものです。

▲木賊　平物の花器に生けるがよろしい、生け方がありますから項を更めて別に說くことゝします。

▲撫子　枝數を澤山に使ふがよろしい。

▲紫苑　初心者には葉つかひの六かしいものですから初心の人は手にせぬがよろしい。

▲菊　菊にはいろ〳〵の種類もあれば花には大輪なもの小輪なもの等ありますから之れ等の出生をよく呑み込んで生けるがよろしい、花道に志す人は菊の生け方によつて其道を味ふことが出來ると云ふほどです、尙申すまでもありませんが大輪の花と小輪の花を取り合す時には大輪を高く小輪を低く用ゆべきです。

▲雁來紅　此の花は大體から水の揚りかねるものですから長く持たさねばならぬ席には使はぬがよろしい。

▲龍膽　蔓龍膽は釣花に用ひますが普通の龍膽は主たる花には用ひません大抵は根本の添えとするものであります。

▲梅もどき　之れも蔓と二種ありますが、蔓の方は矢張り釣生として用ゆべきです、尚花道で使ふべき草木は花葉を主とするのでありますが梅もどきは葉を悉く拂つて實ばかりにして用ゆるものです。

尚各流ともに草木挿方の秘傳と稱へるものがありますけれども初心者が夫れに倣はふとして反つて生花としての本體を損ふ恐れが無いとも云へませんから本編では夫れを殊更ら省略することにしました。

草木應合の心得

生花の應合として用ひるものも其出生をよく正す必要があります、生くべき花は元來

主たるものであつて應合は從たるものでありますから從たる應合が主たる生花を沒することが出來ぬのは云ふまでもありません、ですから其出生を正し花の位を見定めねばならぬのは元よりではありますが、されぱと云ふて際限の無い草木を一々明示出來かねますから其心得としての一斑だけを述べて見ますと。

木に木を應合と云ふことは生花として元來面白くありませんが、併し松に白頂花、柳に椿のやうな格合なれば差支えはありません。

木に木を應合ふことすら既に面白くないほどですから況して草を主として之れに木を應合ふと云ふことは何うも不可ません、尤も中には差支へが無いと云ふものも無いではありませんが併し右云ふ通りの有樣ですから初心の人は絶對に不可ぬものと云ふ心を持つて居るがよろしい。

松の應合には假令草花であらうとも綠のあるものを使つては不可ません。

竹の應合には節のある花を使ひません。

啻に應合で無くとも一つの花器に同じやうな實のあるものを生けることは生花に於

て許しません。

其他個々については生方秘傳の内に述べた通りでありますから御覧なさいですが、要は草木の性質或は出生を正せば殊更ら記すまでも無く自から判るはずであります。

尤も以上述べ來つた處は諸流を通じての骨子とも云ふべきものでありますから、一派の流儀としては或は特に其他口傳などと云ふようなことも無いとは限りませんが、併し夫れは云はゞ其流派の特長を見せるだけでありまして、生花としての大局から見る時には強ち夫れに捉はるべきものではあるまいと思はれます、否、假令何流にせよ一派の流儀に倣はふとせらるるにしても以上の諸説は其資料として悉く活用し得るべきものであるとは著者の自信だけには止まるまいと思ふのであります。

尚以上は流儀花に就て述べたのでありますが次ぎに流儀花の以外にわたる投入花及び盛花について述べて見ませう

第二編　投入花

投入花の濫觴

流儀花には池の坊と云ひ未生流と云ひ遠州流と云ひ其他青山、石州等を初め様々の流儀がありまして然も其何れにしても祖たる人があり爾來其系統を承いで居りますのですから夫れを溯れば歴史的に其濫觴たり根元たる處を探ることは容易でありますが、投入花には一種の系統たるものが無いでは無いにした處で家元のある譯では無く流儀花のやうな花則が無いのですから確然と記すことは出來かねます、ですが夫れだけ採るべき範圍も廣く且つ廣義に解釋を下せば其濫觴は流儀花よりも遥かに古いものであると云ふことが出來ます、即ち流儀花の我國に於ける濫觴は今から凡そ千三百餘年以前推古帝の十六年に聖德太子が京都に六角堂を創建し小野、妹子専務入道を其堂守に命じると共に佛前に供へる爲めに印度から傳はつた立華の法を授けましたが

專務入道は其立華を基礎として一種の生花の法を編み出したのを後世池の坊と稱へられ夫れが系統を受けて諸種の流派が岐れ、遂に今日の如く二百有餘の流儀を産むに至つたのですから流儀花の根元たる池の坊流の始めて出來たのは推古帝の十六年以後で無くてはならぬ筈であります。

處が廣義の解釋によつて投入花は何うかと云へば古事記傳の神代上紀に『天太玉命掘天香具山五百箇眞坂樹懸八坂之五百箇御統中枝懸八咫鏡下枝懸青和幣白和幣』云く々とあります、即ち此の條は天照大神の天岩戸にお籠の節、天太玉命が眞榊を掘り取つて夫れに神寶を飾り以て大神の御心を慰め奉らんとした故事を記したもので其眞榊は根付のまゝと察せられますが夫れでも花器の充分に整はぬ時代として見ると矢張り一種の投入花と見ることが出來るのであります、いや之れを以て投入花の祖と云ふことが出來る道理であります、又其他神代の頃には紀伊の花室に四季の花を以て神を祀つたり大和率川社では三種の花を酒瓶に插して神前に奉つた例もありますれば爾來景行天皇の十二年に夏磯媛が賢木(榊)に飾物を懸けて勅使を迎へたことも又仲哀天

皇の八年車駕筑紫に行幸の節、岡縣主の祖、熊鰐と云ふ者、之れも五百枝の賢木を九尋の船の舳に立て之れに飾物をかけて迎へ奉つたと云ふやうな故事もあります、尤も色花を用ひたのは彼の立華以來だと申しますから夫れ以前は榊のやうな青葉か或は四季の草花と云ふた處で白い花をのみ用ひたことゝ思はれます、斯樣な有樣でありますから之れ等を投入花の濫觴としますれば流儀花は佛に供へる立華が祖となつたに對して投入花は神に供へたものが始めであると云ふべきでありませう。

が併し何事でも時代の變遷につれて發達を遂げ或は其趣も推移するものでありますが花道に於ても矢張り世の風潮につれるのは當然のことでありますのは一定の花體があり動かすべからざる花則のある流儀花に於てすら創始時代と現今とは非常な變化の跡を認めるほどですから況して時代も古く(若し神前に供へたものを其始祖とすれば)且つ流儀花のやうな嚴重な花則の無い投入花に於ては尚更ら變化を來すのは當然のことゝ云ひ得べき筈です、然も其變化は決して自然的ではなく、或る動機に觸れ、或は斯道の好事者によつて改められ、其時代〳〵の流行……と云ふは聊か語弊はあり

ますが併し衆目が夫れを可しとして夫れに倣ふとすれば取りも直さず流行であります‥‥‥其流行を來して知らず〳〵の内に一種の體をなし投入花としての不文律を作るやうなことになるのであります、尤も此の事は何れ項を更めて述べる筈ではありますが、現に今日行はれておる投入花の如きも「投入花は自然體であるから技巧を凝しては不可ない流儀花のやうに花則に拘泥されては面白くない」と云ひながら生けた花體に對しては「何うも此の插け方は宜しく無い此の枝を斯ふせねば投入花として見ることが出來ない」なんかと云ふのは甚だ矛盾のしたやうに聞えますけれども花則或は花體の一定して居らぬながらに投入花としての花體を整へようとするのは其時代の所謂不文律の爲めに左右せられるものと見るべきでありませう。而して世には其不文律そのものを作つた人を投入花の祖と傳へて居るやうでありますが、若し夫れを以て祖とすれば往古から時代〳〵に應じて其體の變化所謂流行體の現はれるごとに祖たる人が無くてはならぬ譯で、從つて世には之れが祖について諸說の紛々たるは決して怪むに足らぬことであります、即ち今投入花のことを述べるに先つて之れを探及す

るのも強ち贅ではありますまい。即ち次ぎに投入花の變遷と題して少しく述べて見ませう。

投入花の變遷

世には投入花の祖は千利休であるとか或は其他曰く誰、曰く誰れ等いろ〳〵の説をなす人がありますが、併し之れを以て始祖とするのは誤りであります、由來投入花は自然を本體とするものでありますから此點から云へば其始祖は前にも述べた通り遠く神代の頃にあると申さねばなりません、元より其時代のことは深く知るべき記錄はありませんから天香具山から眞榊を掘りとつて天岩戸に飾つた天太玉命を始祖とすべきか或は夫れ以前から斯樣のことを行はれたものかは確然云ふことは出來ないとしても紀元以前からあつたものと云ふことは明かでありませう、さすれば利休と云ひ其他後代の人が始めたものと云はれぬ筈でありますが併し流儀花の始祖は立華或は池の坊であるに拘はらず直接に或は間接に其流れを汲んだ其他の諸流では其流派を開い

た先師を目して祖と稱へて居りますから投入花に於ても其時代に應して花の體を新にしたものに向つて其體の祖であると云へば云へぬことは無いではありますまいけれども夫れに對して投入花の創始を意味した祖とは申されません。

尤も斯ふ云へば神代に榊を用ひたのは投入花とは全然別種のものであると說をなす人もあるかも知れません、又著者自身も聊か極端な說と思はんでもありませんが然も投入花本來の性質から見ても又凡ての事物が歲月の經過すると共に進歩し向上することを考へ合せても或は啻に投入花にとゞまらず一般花道に於ける根源に溯つて見ても當然斯く推定………と云へば論據が薄弱なやうではありますが然も確かに推定であります、流儀花の行はれて以來は考故の資料として見るべきものはありましても夫れ以前には一般の人の頭は花と云ふことに重きをおかれなんだ爲めに記錄としては何等の見るべきものは無いのですから僅かに史上に散見する事蹟によつて推定するより外に道はありますまい、而して此の推定は獨り著者だけでは無く、多くの人の推定であるとして見ると推定は軈て事實を生むに至ることゝ信じますが此んなことを

申して居つては理窟に走つて肝腎の本論を疎かにする恐れがありますから推定によるもの及び記錄によるものを綜合して之れに古人今人の說を取捨し系統的に其變遷の跡を述べて見ますと次ぎの通りであります。

▲原。始。時。代。　第一期とでも申しませうか、即ち榊の如き青葉を用ひた時代であります、古い說によりますと挿花として色花を用ひたのは立華が始めであると云ひますから神代から人皇三十四代推古帝の御代まで主として此法によつて居つたものと思はれます、と云ふて其期間に花を賞翫しなかつたかと云へば決してそうではありますまい、奇麗なものを好むのは人間の天性ですから美しい花を悦んだのは今も昔も變りはありますまいが、衣服の如きにまで色あるものを身につけて貴人の前に出るは無禮だとして居つた古往のことでありますから當時は神前或は貴人にのみ供へるものとして居つた挿花に色ある花を用ひなんだのは寧ろ當然のことでありませう、尙此期間には花器のあるべき筈はありませんから根付きのまゝ何かの臺に取りつけたり或は枝を折取つて酒瓶に挿したことゝ思ひます、又花體としては枯葉や穢き葉は避けたで

せうが恰好を整へるやうなことの無かつたのは勿論です。

▲第二期時代　花道の勃興時代とでも申しませうか、彼の專務入道が立華を元として生花の祖を開いた時代であります、此頃に至つて初めて色花を用ひたのでありますが、それと共に其花體は現今の流儀花ほどに調ふては居らず、切り採つた草木の花を其儘花瓶へ摑み挿しに挿したものだと云ひますから云はゞ之れも投入花と見て差支へが無かつたかも知れませんと云ふて之れは佛花とされて居つた處から見ると一方では神前に供へるものは依然舊態によつて青葉のみを用ひて居つたことは推定するにかたくはない筈です又其頃から次第に美術思想が發達を來し文物も盛んになつのでありますから公卿殿上人も花に對して深き趣味を抱いた人も尠くはありますまい、そして專務入道の開いた花道に心を動かした人もありましたらふが中には「花を花器に挿すは誠に愛らしきものだが專務が行つたとすれば佛花である、如何に好ましきものであらふとも佛花を廛が座敷に置くことは出來かねる」と云ふやうな處から專務の生花に對應して自分勝手に所謂投入花として花を挿すことが公卿間に一種の流行とな

り夫れが後へ〳〵と繼承する人があつて尠くも足利義政將軍時代まで持續したものと思はれるのは流儀花の娯樂として世に出たのは義政將軍時代でありまして夫れまでは佛に因みのあるものとして餘興の場所へは餘り用ひられなんだに拘はらず一方公卿殿上人の間では花を樂しまれたと云ふ記錄は尠くありません、其例證の二三を擧げて見ますと古今集春の上に染殿の御前にて花瓶へ櫻を挿したのを題として藤原良房の和歌があります、又伊勢物語には在原行平が饗應の席上で藤を挿したと云ふ故事もあり、それから源氏物語胡蝶の卷に白銀の瓶に櫻を、黃金の瓶に山吹を挿したと云ふことがあります、尤も源氏物語のは中宮讀經の條にあるのですから之れは彼の專務入道の創めた亞流を汲んだものとしても饗應の席上では眞逆佛花とも云はれるものを挿すべき筈はあるまいかと思はれます、要するに投入花は第二期に至つて公卿殿上人の慰みとして行はれたと見ることが出來ます。

▲第三期　東山義政將軍の時代でありまして流儀花の大革命期とでも申しませうか、兎も角も流儀花の花體に大なる變化を來したと共に花道に大發達を見るに至つた

のであります夫れまでの流儀花と云へば立華から變化したものでありますから中心に喬木の高いものをたて其周圍に樣々な草木の花を纏ひ、恰どお寺の塔のやうな形だつたそうです、それを義政將軍は相阿彌に命じて考案させ漸く現今の流儀花に於けるが如き體を成すに至つたのでありますが、其一方で別に花則の無い投入花は流儀花の盛んとなるにつれて愈よ活氣を添へ身分の上下を通じて次第に蔓るの有樣でありました。

▲第四期　千利休時代であります、利休は茶の湯を以て著名でありますが又花道にも深き趣味がありました、ですが萬事閑寂の氣分を悦ぶ茶家には濃艶にして技巧のある流儀花よりも自然の情緒を備へた投入花を悦ぶのは當然であります、ですが投入花之れまた閑寂とも云ひ得ぬ處から之れに自己の意を表はして別に一つの花體をたてるに至りましたが規矩が出來て見ると投入花と云ふことは出來ません、即ち投入花の氣分を脱した一派の流儀花でありまして、世には之れを茶花と云ひ又た利休の創意になつたと云ふ處から千家とも云ふて居ります、(現今では千家古流)此の時代には紹鷗な

ども投入花を愛したと云ふことですけれども世は戰國の折柄ですから投入花と云はず流儀花に於ても一時沈衰とも云ふべきでしたが、德川の世となつて花道は次第に復興し流儀花に對する投入花は影の形に添ふかのやうに或る一種の潜勢力を以て現今に至りました。

▲現今　以上のやうに述べると投入花は創始時代から現今まで格別の變動も無く至極平調に傳へ來つたかのやうに聞えますが決してそうではありません、凡ての事物は其時代の風潮につれるやうに投入花に於ても豪放な氣の滿ちた花を悦んだ時もあれば又優美なものを推賞した時もあります、然も夫れと共に盛衰消長の絶へずあつたことは勿論でありますが投入花としての氣脈は花道の一角に綿々として通じ以て現代に至つたのであります處が現代の投入花は進歩向上したとでも云ひませうか、純朴だつた昔日の面影は次第に失せて流儀花の氣分に稍近づいたやうな有樣を呈するに至りました。

現代の投入花

昔の投入花の眼目とする處は一に花にありました、ですから花の美を愛すると云ふことに主きをおいて枝葉は見苦しからぬものを使はぬ限り其風姿の如何は別に論ずる處で無かつたやうであります、約まり山野から採り來つた花枝を其まゝ花瓶に挿して樂むと云ふのは投入花の本體として居つたものと見られます。處が現代の投入花としては花を愛すると云ふことは今も昔も元より變りは無い、そして或人の說では花は一室の主座たる床に置くものであるから禮を正さねばならぬ姿の亂れたる花枝は床に用ゆべきでは無い、然も野生其まゝの花は姿の整ふたものでは無いのだから之れを花器に挿れるには其體を正すべきは當然であると云ふのであります。

即ち斯ふ云ふ意味の下に強ち流儀花の體を模すと云ふ譯では無くとも天地人三才の心持を聊か含まして挿けるやうになつたのでありますが之れを一面から云へば現今の投入花を樂む人は別箇の人では無く殆んど其大部分……と云ふよりも全體と云

ふても差支へはありますまい、其全體の人は何れも流儀花の餘技として行ふ處から自然流儀花に近いたことゝなつたのかと思はれます、併し以上の説は道理ではありますにしても元來此の花は略式のものでありまして正式の席上に生くべきものでは無く從つて花に威嚴を備へるよりも寧ろ花として天然の美を觀賞すると云ふのにあるのですから假令風姿を正すにしても流儀花のやうに花則に捉はれて仕舞つては投入花としての精神を失ふことになります、之れを美人に譬へて申せば流儀花は白襟紋付の禮服着用……で無くとも尠くも扮裝を調へた美人、又た投入花は湯上りに薄化粧を調へた清洒な姿の美人とでも云へませう、ですから如何に美人とは云へ亂れ姿のまゝでは其美を充分に發揮し得ぬやうに投入花として挿すべき花も多少其姿を調へねばならぬにしても餘り技巧に走つて所謂扮裝を調へた美人にならぬ範圍に行ふ心が肝要であります、然らば其範圍とは何れほどでありませうか之れは項を更めて次ぎに述べませう。

投入花の心得

生花の本體は諸流ともに花の虚實を整へると云ふことになつてをります、即ち虚とは技巧、實とは自然體のことでありまして此の兩者を相半し相調和して初めて生花となるのでありますが夫れと共に樣々複雜な花則のあるのは勿論です、處が投入花……現代の投入花では流儀花ほど複雜なことは無くとも多少其花則に準ぜねばならぬ内にも其出生を正すことを第一とせねばなりません、此點に於て投入花から變化して流儀花を成すに至つたと云ふ松月堂古流の花荏使用本意はよく盡してをります、即ち次つぎに摘錄して見ますと

(前略)花は自然を尊ぶべし、故に花葉は自然の恰好よきを見出し有のまゝを挿成す事是生花の本意なり、然しながら生なるまゝにて姿のよきは稀なり、因りて大方はすこしづつためなほして恰好を見合はせ挿るなり然れども多くは横へそだちし枝をもつて種々と遣ひなす事あり、されば出生にあるべきやうため直してつかふは上手の

つくす事なり(下略)

之れ投入花を生けんとするものに對して誠に適切な心得であります、現代の投入體は流儀花に準ずるとは云ふものゝ天地人の三才或は五備などは其心を持つて居れば必らずしも整へるに及びませんが右に記した通り假令恰好の宜くない枝を用ひるにしても之れを自然化すると云ふことは極めて大切であります、尚或る古書には生花(流儀花)の精神として次ぎのやうに記されて居りますが之れも現代の投入花に律すべきでありませう。

生花と云ふは習ふ事も無く自然と花より敎ゆるものなり故に我が心の思ひいれを生るは出生にそむき無理を生るなり、花より敎ゆると云ふは枝垂るゝものは枝垂らしていけ直なるものは直ぐにいけ、梅の屈曲あるは其姿によりて生る、是れとりも直さず花より敎ゆるなり、又生けぬ先より生つてある花といふものあり、山吹藤の類は各別にかはりて生けらるゝものにてはなし然るに我こゝろに合せるため曲めて生るは自然の花の姿を失ふこと多し、云々

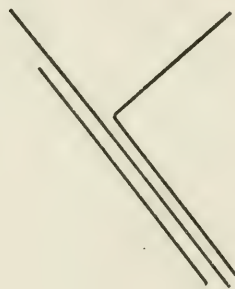
此の心は普通の流儀花にも大切でありますが殊に投入花にありては最も味ふべきであります。

投入花の體と花器

投入花は以上述べ來つたやうな有様で生くる人の心のまゝに挿すべきを本體としますから必らずしも斯ふせねばならぬと云ふ譯ではありませんが、此の花には横體を餘り用ひません、そして配木或は花臺を用ひぬを本來として居る處から花器は主として壺或は其他筒形のものを用ひることゝなつてをります、尤も現代では流儀花に近いた結果此範圍を次第に脱した傾きがあります、けれども夫れとても已を得ぬ場合の外は好みません、そして現今で多く用ひられて居る花體は文人花に稍似て居りますが、之れを文人花及び流儀花と對照して見ますと次ぎのやうなものであります。

無論圖は骨子を示したものでありますが之れによつて其一斑を窺ふことが出來ると思ひます。

投入花

文人花

流儀花

投入花の配木

花器は前に述べた通り水盤等の如き平物は使ひませんから花留は無論用ひるべきことはありませんが、配木は根締めの納まりかねる時に限つて用ひぬでもありません、だが夫れも本來なれば流儀花に使ふやうな跨木では無く投入花特有の……現今では流儀花でも時には應用することは無いとも云へませんが……配木をすることゝな

つてあります、尤も之れは配木と云ふよりも寧ろ挾み木と云ふ方が適當かも知れません、兎もあれ其方法は下の圖に示した通りのやうになるのです即ち甲は花の根本でありまして其切口を竪に切り割り、其割目へ乙の小枝を挾むだけで、之れを花器に挿れますと挿んだ小枝は花器の内部に附くことゝなりますから花は夫れが爲めに支へられ横に轉がる憂ひも無くなる道理であります。

嫌ひ花と忌み花

流儀花には何んの花を使つては不可ない、何う云ふ風に花葉を挿しては宜しくないと云ふように所謂嫌ひ花或は忌み花はあるが、投入花には別段花則は無いから使つても差支へは無いかと云ふと之れは考へ物であります、元より本來から云へば單に花の美を愛すると云ふのが投入花の主旨でありますから花さへ麗はしければ其他には差支への無い筈でありますけれども、現代化した花體とし、且つは風姿を重んじるようにな

つて見ると之れも愼むべきは當然でありませう、心を慰さめ目を樂しむべきものに宜しく無いものを用ひるのは逆でありますから先づ用ひぬやうになさい、と云ふて之れとても流儀花のやうに絶對的用ひてはならぬと云ふ譯ではありません、要は其用ひ方の如何にあるのですから之れは挿す人の心に任しておくより仕方はありますまい。

草木の取合せと用ゆべき枝數

流儀花に云ふ嫌ひ花或は忌み花と投入花に就いては前に述べた通りでありますが、次ぎに之れも流儀花では大切な花則として居る草木の取合せは何うかと云ひますと之れも別段定めは無いのですから生ける人の勝手であります、ですが其取合せに就いて心得ておかねばならぬのは彼の山里水の順序であります、山は高く陸は中に水は低きものたるは自然の狀態でありますから如何に定まつた花則の無い投入花にした處で自然を本體とする以上は是非に之れを守らねばならぬ筈であります。

夫れから投入花として用ひる花の枝數、之れも流儀花に準じて奇數即ち半目の枝數、例

へば三本、五本、七本、九本、十一本と云ふ割合を以て用ひることです尤も投入花には餘り澤山な花數を使ふようなことはありませんが………。

次ぎに取合せの種類數、之れも流儀花の内には八釜しく云ふ流派もありますが、投入花では枝數さへ奇數になつて居れば種類は別段八釜しく申しません。

投入花と茶花

世には投入花は茶室に用ゆべきものである、投入花は茶花であると云ふ人があります、如何にも一應は道理な説ではありますが、併し投入花の本來は決して茶花として出來たものではありません、寧ろ茶花は投入花から變化したものであります、尤も此の事は前に投入花の變遷の項に松月堂古流、或は千家古流の始めとして述べましたから今更ら繰り返すには及びますまいが此の誤解を來したことに就いて今一つ起因となつたのは投入花對茶花の問題では無く投入花對利休の話でありますが、人は利休と云へば直ちに茶と云ふ感念を直感に抱く處から斯ふ云ふ説が出來たゞけでは無く延いて利

休を投入花の始祖のやうにすら傳へるに至つたのでありますと云ふて之れは花道では眞面目に語るべきほどのことでは無く寧ろ滑稽談とも云ふべきでありますが笑ひ話として次ぎに述べて見ませう。

投入花と利休

何人でも其道に達すれば夫れに對して樣々と附會の説をなすものでありますが利休が投入花の始祖であると稱へられて居ることに就いては次ぎのやうな話も其一因でありませう。

豐臣秀吉が大軍を以て小田原攻に出陣をした時、平素秀吉の氣に入りであつた利休も隨從を命ぜられ陣中に於て時々茶をすゝめたと云ふ話もありますが其當時のことであります、或日秀吉には陣中の無聊を慰めん爲め利休に何か面白き花を生くべく命ぜられましたが何分にも突然の仰せで何等生花の用意のあるべき筈はありません、と云ふて之れを辭退すべくも無い處から利休は突然の氣轉を以て恰ど其場に在り合した

馬盥を早速の花器に見たて雜兵に夫れへ水を入れしめる、一方では自ら山中を探つて時の花を二三種取り合せ花留の代用として持合せの小柄を根本に括りつけ、それを馬盥に投げ込むと花は小柄の重みによつて水の上へ見事に生つたので秀吉を初め近侍の人々は大いに感賞し「天晴れ投入れは見事である」と云ふたのが投入れの初めであると云ひ傳へてをります。

成程、水中に投げ入れたのだから之れは慥かに投げ入れに相違はありますまい、落語か茶番にすれば上乘の出來でありませうが併し之れを以て利休を投入花の始祖とするのは誤りでありませう、利休でなくとも多少禮儀を心得て居るものなれば如何に一時の興とは云へ假りにも關白の御前で小柄を括りつけたものを投ぐべき筈はありますまい、況して斯道を心得た利休として靜かに生くべき筈の生花を眞逆無作法なことをして挿るべき筈はありません、若し秀吉の命を畏んで馬盥を花器に見立て小柄を花留に用ひたとすれば、かねて投入花の心得ある利休のことですから花を投入花體に生けた上、之れまでは投入花の體を心得ぬ秀吉に對して「之れは投入花と申す花體に御座い

ます」とか挨拶をしたものと思ひます、それを誤り傳へたか或は利休の功名話として誰れか附會の說を稱へたものでありませう。
之れ等は只だ一箇の笑話としてなれば兎も角、利休を讃めんためにしたものとすれば反つて其無作法を表白し、利休を傷けるものとなる譯かと思ひます。

利休の牽牛花

今一つ利休の投入花として傳へられて居るものに斯んな話があります。
秀吉は利休の住居に牽牛花の見事なのが澤山にあると聞き及ばれ夫れを賞觀の爲めに出向ふべく仰せ出されますと、夫れと傳へ聞いた利休は其早朝庭の面に咲き誇つた牽牛花を一本も殘さず引き拔いて取り捨てさせ、其內の只だ一二輪殊の外見事なのを花ばかり千切つて水盤に浮かせ床の間に飾りつけました。
とも知らぬ秀吉には利休の住居へ態々出向はれて見ると聞きしとは案外の相違で庭には一本の牽牛花も無い處から訝しく思はれながら利休の案內によつて一室に通つ

て見ると床の間には今云ふ通りの有様なので是又た甚く感賞せられ「利休、之れも投入花か」と仰せられたと云ふ話があります。

之れも牽牛花の花を千切つて水上に投げ入れたものですから云はゞ事實に於ては投げ入れに相違はありますまい、のみならず或人は之れも投入花に見て居るやうではありますが併し花の自然を尊び美を愛すると云ふ方面から云へば決して投入花の本來に適つたものとは申されません、と云ふて利休ほどの人の行つたことですから花道に逆つたやうなことはありますまいが投入花の方から云へば先づ茶花の一種とも云ひませうか但しは強て名をつければ氣轉花とでも云ひませう。尚此種の投げ入れについて遠州流の祖小堀遠江守にも一つの話があります。

投入花と小堀遠州

小堀遠江守政一は遠州流の祖として斯道に著名なのみでは無く茶道等にも堪能であつたことは今更ら云ふまでもありませんが此の遠州と投入花について或古書(大分以

前のことですから書名は確と覺へませんが確か花道茶話と云ふ標題だつたかと思ひます)に笑ひ話として次ぎのやうなことを記されてありました。

小堀の邸へ出入りする商人で遠江守の氣に入りのものがありましたが其者も花道に常々から趣味を持つて居ると見へ、我が家へ歸ると見樣見眞似で生花の形を拵へて見ては知己昵懇のものに對して「自分は小堀の殿樣から花道の指南をうけてをる」と誇り顔に吹聽をして居りました、尤も當時遠江守の格式は大したものでありましたから如何に其技が堪能であらふとも門弟、殊に町人を門弟として敎へるやうなことは無かつたのであります、ですから其町人は尙更ら自慢話として吹聽したのですが、其自慢を聞かされるものゝ身になつては如何に何んでも遂には鼻につくのは當然のことで其結果は忌々しさとなつて「お前さんは小堀の殿樣から花の傳授を受けて居なさるのが眞實なればセメて一度くらゐは殿樣のお生けになつた花を頂戴して來そうなものではありませんか、幾ら殿樣だつて師弟となればお手本の一つや二つはお授けになるのは當然と思ふが」と一人が云へは又一人「左樣〳〵私達は殿樣のお邸へ出入りをするので

は無し、お前さんが幾ら御自慢をなさつた處で何か證據が無ければ眞實とは思はれません」なんかと嗾し立てられる處から此方も行き掛り上「エヽそりやお願しさへすれや出來んことは無いのだが之れまでは餘り恐れ多いから控へて居ましたのぢや、ですがお前さん方がそう云ひなさるのなれば宜しい今度殿樣のお手際の時にお願ひをして頂戴してくるから其時は念晴しに見せて上げませう」と斯んな話で其場は濟みましたものゝ今度は此方が忌々しくてたまりません「折角の自慢の腰を折られて何うも癪に觸る、と云ふて眞逆殿樣へお願ひ申すことも出來まい、何んとか此の腹癒せをするよい工風が…………」と考へてをりましたが、或日のことに小堀の邸へ出かけて行くと遠江守は折柄無聊の爲めに誰れか話相手がと望まれて居つた所だけに直樣御前へお召出しになる、何分にも町人のことだけに身も輕く人の機嫌を取ることに如才は無い、彼の町人は何かと世間話の內にフイと見るとお居間の隅に古ぼけた花器へ二三種の花を挿したのが置いてあるから「恐れながら殿樣へお伺ひを致しますが結構なお花を何うして彼んな處へお置きになつたので御座います」と恐る〳〵聞くと遠江守は笑ひながら

「ナー＝彼の花器は最早嫌ひになつたから取り捨てる目算ぢや」「でもお花をお挿れになつて居るぢや御座いませんか」「花が、使ひ殘りが出來たから投げ入れておいたのである」「へーエお投げ入れ………、使ひ殘しを投げ入れたと云ふのを何う聞いたものかサモ感心したやうに暫らく眺めて居つたが「エヽ殿樣、誠に御無體を申し上げて相濟みませんが、只今承はりますれば彼れをお取捨て遊ばすとの仰せ、勿體至極も無いことゝ存じますから若しお差支へが御座いませねば何うか私めに御拜領を仰せ付けられたふ御座います」「ホヽー其方が持つて歸つて何んとする氣か」「仰せ迄も御座いません、實は其：：お邸へお出入りをさして頂きますお蔭で私めも何んとかの人眞似とでも申しませうか家へ歸りますと近頃ではお花の稽古を初めて居りますので」「何んと云ふ、其方も花道に志しをるとか、それは感心〳〵望みとあれば苦しふない、花の儘持ち歸つてもよいぞ」「へヽーッ、有り難ふ御座います」

思はぬことから望みを果したから大悦で、其儘叮重に持つて歸ると早速床の間を淨めて夫れを飾る、例の言葉敵となつた面々は元よりのこと、其他知己の一同へも早速知ら

せる、そうなると知らせを受けた連中は「そりや大したものだ、小堀の殿樣は名人だと云ふことをかね〴〵聞いてはをるがまだ拜んだことは無い、また彼奴も彼奴だ常々自慢だけは聞いて居つても眞逆とは思はなんだが其殿樣からお花器までも頂戴したとは豪い、今日は相憎手の放せぬ用事があるけれども今日外しては今度は何日拜めるか判らぬから是非出掛けて行かふ」と云ふやうな有樣で其花を見るのを寶物の拜觀かなんぞのやうに出かけて行く、そうなると夫れを聞き傳へて之れまで一面の識も無いものまで御當家に小堀の殿樣がお生けになつたお花があるそうですが何うか話の種に拜ませて頂きたい」と賴み込むものもある、尤も現今こんなことを云ふと馬鹿〳〵しいやうなものであります。が、其當時生花と云へば高貴の御殿で無くば生けたもので無かつたそうで、然も小堀遠江守は前にも述べた通り中々資格があつたのですから其頃の町人としては別に不思議でもありません。

そうなるといよ〳〵自慢の鼻を蠢めかしたのは其家の主人であります「何うです之れは小堀の殿樣が手前の爲めに態々お生け下さつたのですぜ、尤も之れは本式のお生け

方とは違ふのです、本式のお生け方は中々何うして我れ〳〵のやうな町人風情の家へ置くものぢやありませんからなア、エ、此のお花ですか此れはその何んでもお投げ入れとか云ふ生け方だと仰言てゝしたなんかと説明をしますと、聞く方でも誰れだつて疑ふものはありません「成程なア、そりや御道理だ、町人風情の身分でお公卿様方のお用ひになる生け方をするものではありますまい、ハ、ン、お投げ入れ……そりやよいことをお聞かせ下さつた、それでは之れから我れ〳〵も此のお投げ入れの稽古を少しくやつて見ようと中には物好の人の言ひ出しで其家の主人を始め同じような連中が寄り集り其花を手本に花の稽古を初めたのが夫れから夫れへと知れ渡り町人花と云ふことで此の變體の所謂お投げ入れが一時町家で盛んに行はれたと云ふ之れも落語にありそうな事實談だそうであります。

投入花の辨

大體投入花と云ふ名目が名目でありますから至極輕らかな生け方のやうに聞え延い

ては前に述べたやうな笑話の種を蒔くのでありますが其原始時代は兎も角、中古以來は決してそんな意味で生けたものではありません。

現今でも投げ入れを何んでも無い花のやうに思ひ花の體も何も構はず只だ花の枝を其まゝ花器に突つ込めば夫れでよいとして居る人も尠くないやうでありますが、それは大變な間違ひと云はねばなりません、投入花の本意とする處は自然を尊ぶのでありますから枝なり莖なりを其儘で挿し込めばよいやうではありますが併し自然は自然にしても枝や莖としての自然では無く假りに木の枝なれば其枝を以て其木が野或は山に生えて居る自然の姿を表はさねばならぬのであります之れを一口に云へば木の分身である枝を以て分身ならぬ一本の木の全樣に見すべく姿を整へねばならんのでありますから其間に一種の技能が無くてはならぬのは云ふまでもありますまい然も彼の流儀花なれば一定の規矩がありますから其規矩によつて五備を整へ、忌み花嫌ひ花を避け、作法に準じて生けさへすれば其妙味の如何は兎も角、生花としての體は整ふことになるのでありますけれども投入花には其規矩も無く花則も無いだけ千態萬樣

の枝振に應じ機に臨んで枝葉を使ひ扱し、それによつて自然に生へた草木の風趣を表はさねばならんのですから之れを生けるのは容易に見えて中々容易ならぬものであります、ですから此の投入花を投入花らしく生けるには尠くも流行花の中傳以上の手腕が無くては出來ぬ筈であります、世には流儀花は厄介だが投入花くらゐなれば生けて見せるなんかと云ふ花道の初心者がありますがそれこそ以ての外と云はねばなりません。

投入花の學び方

以上のやうに述べ來りますと投入花を學ばふとするには一向摑へどころが無いやうに思はれます、いや事實に於ても流儀花のやうに何うしてお生けなさいと指示の出來るものではありません、流儀花なれば花の扱ひ方から體の整へ方を初め其他萬般のことは一定の規矩によつて行ふのですから一々何うなさいと云へますが投入花は如上の通りの有樣で格の定まつて居らぬだけ夫れは困難ではありますが併し強て云へば

其學ぶべき階級だけでありませう、即ち或程度までの階級だけを述べ夫れ以上は之れを志す人の技能を待つより致しかたはありません、然らば其階級とは何かと云へば先づ第一に實物の研究、即ち草木の地上に發生した風姿と其出生を常に努めて研究することであります、そして諸種の草木の風姿を粗ぼ吞み込めるやうになれば次ぎに枝を以て其全體の風姿に摸る稽古をなさい、摸る稽古とは枝の小枝の拂ひ方或は添え枝の使ひ方如何によつて先に吞み込んだ一本の木の風姿に倣はす稽古であります、因みに初心の人は最初に草花よりも木の方が扱ひ易いことを序ながら申しておきます。

斯ふ云ふ風にして枝を以て木の風姿を摸ることが出來るやうになれば更らに其風姿を整へる稽古であります、即ち野生其まゝの風姿は之れを人間に譬へて見ると髭は茫々と生えて少しも手入れのして居らぬ身體でありますから之れに剃刀をあてゝ醜い髭を剃り落すやうに見苦しい枝を拂つて仕舞ふのですが現代の投入花としては其標準を流儀花の夫れを手本とするがよろしいでせう、と云ふて强ち夫れに倣へと云ふのではありません、夫れを手本として成るべく其風に似せてやらふと云ふ心持で整へるの

でありますから生花に比べて枝が足らぬから添えねばならないとか、此の枝は生花よりも多いから斬つて仕舞はねばならぬと云ふようになつては面白くありません、枝が足らずとも夫れでも地から生へたやうな體になつて居つたり枝が多くとも邪魔にはならぬやうなれば原形のまゝで捨てゝおくがよろしい、兎も角も此んな風で稽古を重ねてゆく内に知らず識らず其呼吸を覺えるものでありますが此の花は前の項にも述べた通り尠くも花道の中傳以上の資格ある人でこそ初めて思想通りの花を見ることは出來るとしても斯道に何等の心得も無き人なれば先づ流儀花を修めた後にするがよろしい。

尚池の坊流には投入花と稱へて卓下に生ける花がありますが之れは本編で云ふ投入花とは別種のものであることを念の爲めに云ふておきます。

以上は投入花の骨子とも云ふべき要點を述べたのでありますが次ぎに現今旺盛を極めて居ります盛花に就いて更らに述べて見ませう。

第三編　盛花

近代式の盛花

盛花は近代の流行花として遽かに勃興しましたが盛花の名は決して新らしいものでは無く古き昔に行はれたやうであります、尤も當時の盛花は其系統を支那より受けたものらしく其形もよく似て居りますが、現今の盛花は其名に於ては同一ではありますけれども實質に於ては全で異にして居りますから茲には現代のものについてのみ述べることゝしました。

現今の盛花は近代に至つて始められたもので其出所は大阪の池の坊の師範某家であると云ひ又た其祖は京都だとの説もありますが要するに京阪地方から最初行はれたものとすれば間違ひはありません、それから漸次諸國に弘まり遂に現今の如く旺盛を見るに至つたものであります。

處で此の盛花とは花を盛ると書きますが盛花の本來としては其字義を以て通じるものではありません、花を盛ると書く盛花は何等の趣味も無く只だ無暗と色花を籠に束ねたり或は造花を以て飾りたてたものに適すべき語で生花の一種として見るべきものは其花の精神に於ても又形に於ても決して盛なる文字を用ひるべきものでは無いのであります。

何故盛花に對して盛の字を使つて至當では無いかと云ふに前に述べた投入花は草木の自然を單純に摸つたものでありますが、盛花は集合したる草木の自然を摸すのが精神であります、語を換へて云へば投入花は單に一樹數草の自然を摸るに對して此の盛花は夥多なる草木繁茂して其間に紅紫の花の點綴した森、或は喬木雜草生ひ茂つた山邊、さま〴〵なる草花の咲き亂れた野原、水草の趣深き情をうつす澤邊等廣大な天然の風景を一器に集めると云ふのが本體でありまして唯だ花を無暗矢鱈に盛るが如く差し込むのを以て得たりとするものではありません、ですから此意によつて强いて文字を撰べば盛花とするよりも寧ろ森の字を當て嵌めて森花とすべきは最も適したもの

と思ふのであります。
が、現今では一般に盛花として認めて居りますから字義に就いて理窟は申しますまい、いや、本編は其花體の研究にあるのですから夫れを論ずべき必要は元よりあるべき筈は無いのですが、併し此の花を生ける上に於ては是非森なる意義を忘れないやうにすべき必要があります、念頭に此事が無く只だ盛花なる觀念を以てすれば或は雅致なく趣味の無き飾り花たるを免れぬ結果に墮るだらふと思はれます、繰り返して申しておきます、盛花は盛花では無く森花たる觀念を持つて生けねばなりません。

盛花の格

前のやうに云へば盛花と投入花とは集合體を描すと單純なものを摸に大小の差はあれ自然を尊ぶと云ふことに就いては同じ精神であるから盛花を生けるにも投入花のやうに一定の規矩なく花則は無く只だ之れを生ける人の意に應じてよいかと云ふに此點には大いなる相違があると云ふのは投入花は中古で流儀花或は其他時代によつ

て左右せられたことがあるとは云ふものゝ其根元とする處は何等の花則も無かつたのですが盛花は花則の嚴格な流儀花から生れたものでありますから矢張り夫れに據らねばならぬのは當然のことであります、ですが前にも述べた通り集合體でありますから流儀花のやうに一本の樹、一株の草に三才五備を備へる譯には參りません、ですから之れ等の格は一器の全體に亘つて具へることゝなつてであります、其詳しいことは以下順次に述べますから御覽なさい。

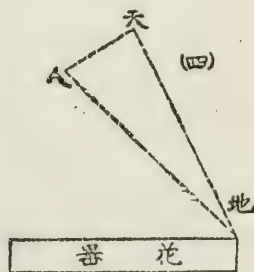
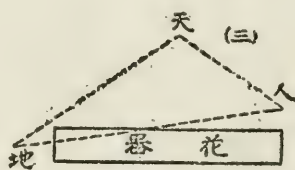
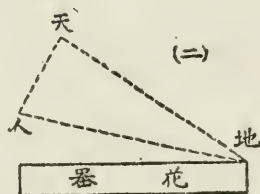
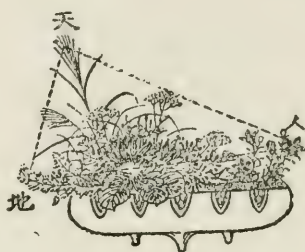
盛花に用ひる花器

花を集合體に生けるのですから之れには筒形の花器を用ひません、是非とも口廣き水盤の類であります、從つて配木は要りませんが其代りに花留が無くてはならぬのは當然のことであります、尤も花留の種類には觀世水、蛇籠、龜、轡、蟹等いろ〳〵ありますけれども主に用ひるのは觀世水か蛇籠或は龜くらゐのもので轡や蟹などのやうな半ば裝飾的のものは滅多に用ひません、殊に普通流儀花のやうに水際を見せる塲合は多くあ

りませんから觀世水以下の三種も是非に何れを用ひねばならぬと云ふことが無いだけ流用の利く譯であります、と云ふて之れは多くの塲合と云ふに止まつて總ての盛花は夫れであるとは申しません、殊に澤邊などを表はす時には水を見せねばならぬことがありますから其塲合は無論流儀花に準じて相應すべきものを用ひるは申すまでもありません。

盛花の體

盛花には三才五備を具へねばならぬことは前にも述べた通りでありますが此の配置は流儀花のやうに一定の格があるのでは無く、一器の內に生けた花の全體に割りあてればよろしいのですから其點に於ては流儀花ほども嚴重で無くとも宜しい從つて流儀花では其格を竪鱗或は橫鱗の何れにせよ三角形の內に是非に納めねばならぬことになつて居りますに引き代え盛花では必ずしも正三角で無くとも差支へはありません、いや、差支へ無いどころでは無く流儀花のやうに一本の樹、一株の草によつて其體を

なすのではありませんから正三角では何うしても納まるべき筈はありません、ですから盛花では不等偏三角形を以て型とすることゝなつてあるのです、即ち左に其例を示して見ますと。

(一)圖は花體を示し(二)(三)(四)は格の例を示したものでありますが、(一)は水陸草を取合したもの、(二)は木と陸草の格、(三)は水草或は蔓物、(四)は喬木と陸或は水草ともすべきもので其他斯樣の例を擧げては際限はありませんから餘は之れに準じることゝすればよろしい。

尚申すまでも無く天は陽、地は陰でありますから如何なる草木の取合せをするにしても天は高く地は低くして所謂陰陽の和合と云ふことを忘れぬやうに心掛けねばなりません。

盛花と置くべき位置

流儀花は凡て床の間に置くべきものと定まつて居りますから主位、客位、即ち本勝手と逆勝手の二様を床の方向に準じて生けゆければ宜しいのですが盛花は室内の装飾として飾られるものでありますから置くべき位置は一定して居りません、例へば日本室なれば床の上に置く場合もありませう、又た床脇の板敷の上、或は違ひ棚の上、机上等、又た西洋室なれば應接室の卓子の上或は窓際、壁際、室の隅等でありますが、其位置に應じて插すべき花に夫れ〲心を用ひねばならぬのは勿論であります、以上述べた位置によつて其概略を擧げて見ますと。

▲**床の間の盛花**　之れは云ふ迄も無く一方正面ですから正面の方の一方から見る

べきよう花體を整へるのは勿論ではありますが、夫れと共に少しく見下すやうになるものですから成るべく葉の下を向かぬものか或は緣にかゝらぬものか、下の葉が水際より高い目になる水草のやうなものを挿れることゝすればよろし、さも無くて花器の緣に垂れ下つては生氣に乏しく見えて見苦しいものであると思はねばなりません。

▲床脇の板敷の上　之れは床の間の體を以て更らに心すべきは勿論であります。

▲違ひ棚の上　之れには花體の脊の高いものは宜しくありません蔓物で……強ち蔓物で無くとも上から見て葉の先で花器の緣を隱すくらゐのものでもなれば恰どよく見えるものであります。

▲机上　日本室に置く机の片面は大抵緣側に面した敷居際につけておくものですが正面と右或は左方から眺めることゝなるものですから机の置くべき位置に準じて二方より見るべく挿れねばなりません、尤も花體は床に置くものに準じてよろしい。尙座敷の眞ん中に置くべき机なれば次ぎに述べる應接室の卓上と變りはありません。

▲應接室の卓上　申すまでも無く西洋室の應接間であります、此の卓は室内の中央

に据えるのが普通でありますから此の卓上に置く盛花は四方より見るように生ける心掛けが無くてはなりません、それには天を花器の中央に偏して(全然中央となつては花に面白味の無いものであります)挿し、其他の花葉は其四方に挿せば宜しい之れを例して云へば前に例圖を以て格合を示した(三)圖の型を標準とすれば宜しいでせう、尤も此場合は地人の格は必らずしも定めなくとも差支へはありません、即ち一方から見て人の枝と見た枝が他方から見えずに別の枝が人の代りとなつて居るやうなものですが之れは苦しく無いと云ふのであります。

▲窓際　花體は其高低に準じるのは勿論でありますが夫れと共に色の配合に注意するが肝要であります、尤も盛花は他の生花とは違ひ諸種の草木を集めるのですから花にもいろ〳〵の色が雜り隨つて其配合に注意をせねばならぬは勿論でありますが其内にも窓際に置くべき花は光線を受くることが最も激しいものでありますから殊に其配色の注意を怠つては折角の花體も一向引き立ち難き結果を來すものであります。

▲隅に置く花　之れも西洋室の隅です、之れには投入花を置く場合が多いやうですが又た時には盛花を置くこともありますから茲には投入花と併せて述べることゝしました、處で此の向けように就いては次ぎの圖のやうに一方を正面とするもの二方を上向とするもの或は一角を正面とするものゝ三樣あります、そして此の三樣は置くべき隅の模樣によつて異にすべきは勿論であります即ち(一)圖の場合は扉の左方の突當りに置いたもので之れは二方を正面とすべきは順當であります、尤も此の置方に就いて或人の說ではイを正面とすればそれでよいと云ふては居ります、成程、イは扉を開けて這入ると直覺に眼につく場所ですから迎へ花として其方面を向けるのは一應道理のやうではありますが、併しそれでは這入り來つた時だけの眺めで客が其室內に居る間は花の正面は客の視線を外れることゝなります、又客の歸る時は側面を見て歸ることゝなりますから之れはイとロの双方を正面とすべきは至當でせうですが之れが第二圖のやうに扉があればロの一方だけを正面として差支へはありません尤も本來なればイとロの合したハの角を正面とするのは至當でありますけれども……。

又若し扉の反對の方向に置く場合はイ、ロ、ハの三方を正面とすべきは正當であります尤も室の模樣によりまして主人の椅子の座が定つて居れば強ち三方正面とするには及びませんが客と其場合によつて何れが客の椅子となるか何れが主人の椅子となるか定まらぬ時には三方を正面とするがよろしい、ですが花或は花器の都合等によつてハを正面として苦しくはありませんが之れにはイ、ロの二方を正面とするのは宜しくありません。

(一)

(二)

(三)

即ち圖の二は扉でありますが三圖の點線を以てしたのは入口が何れにあるとも同樣であることを示したのであります。

草木の配置

盛花に用ひる草木の配置は之れも流儀花の山里水に準じて木は高く陸草は次ぎに、水

草は低く、又た木と陸草なれば無論木は高く陸草は低く、又陸草と水草なれば陸草を上に水草を下にすべきは普通ではありますが、併し陸草或は水草の內にも薄や蒲のやうな脊の高いものがあれば木の內にも喬木と灌木の分ちがありますから之れが出生を正すべきは申すまでもありません、それから陸物と水草類を一器に入れる時には少し離して挿すのが本來であります、又之れが區別をする爲めに陸物だけを砂生けにすることもありますが此場合には流儀花に用ひる三才の石或は蟹の花留を使ふ例は珍らしくありません。

茲でも念の爲めに申しておきますが、盛花は森花であることを心に持つて居るが肝要であります。

色の配置

凡ての色は其配合の巧拙如何によつて美感を呈し或は憎厭の感を覺えしめるものでありますから室內に於ける一種の裝飾として用ひられる盛花に於ては此の配合を巧

みに取合すことが肝要であります、從つて盛花を挿けるには誰れしも其體を整へるよりも此の配置に心を使ふのでありますが然も其一面では色の配置に一定の格がありますと云ふて之れも流儀花ほど嚴格では無いにしても白と黄の二色だけは上位に置かねばならぬことゝなつてをります、そして普通の場合は白は一に黄は次位とし、菊を用ひる場合に限つて黄菊は一に其他の白色の花……假令菊なりとも……を次ぎにすることは動かすべからざる花則でありまして其他の色は三位以下之れは適宜に用ひて宜しい、尤も之れは木物なれば木、草なれば草の同種のものに對する配置でありますから木と草と取合した場合、それも成るべく此の配置によるに越したことはありませんにしても夫れが爲め山里水の格を失つては不可ませんから夫れには強いて適用するにも及びません。

尚心得にまで云ふておきますが大輪と小輪の取合せは大輪を成るべく下にして小輪の花を上にする心持で生けるがよろしい、大輪を上に置いては花の格好が整ひ惡いものでありますから草木の配置或は色の配置の上から大輪の花を上にせねばなら

ぬ場合は其蕾を上に使ひ滿開のものを下にして宜しい。

禁花嫌ひ花忌み花

流儀花には禁花(用ゆべからざる花)忌み花(挿し方の宜しからざる花)嫌ひ花(挿して宜しからざる性質の花)等ありますから盛花にも之れを適用するか何うかと云ふことに就いては未だ一定した說はありませんが其云ふ處では『盛花は略式の花の內でも生花として見るよりも寧ろ飾り花とするものであるから見苦しからざる限りは流儀花に準ぜ無くとも差支への無いものである』と云ふのと『假令略式の花であらうとも兎も角生花と名のつく以上は矢張り生花の格に準ずべきは至當である、元より其體は集合の花であるから之れを總括して評する時は或は美觀を削ぐ恐れが無いとも云はれまい從つて忌み花の如きは集合した花體を以て論せず種類々々に應じて正せばよい譯である、尤も禁花或は忌み花は古來花道に於て用ひぬことゝして居るのだからその取捨は今更ら論ずる迄も無い』と云ふやうな所謂固守的な說と『凡ての物事は時代に

應じて變化してゆくものであるから假令生花であらうとも矢張り其時々の狀態に應ずべきは勿論である、殊に盛花は近代に至つて世に出たものとすれば矢張り近代式の方法によるべきもので強ち古來の說に拘泥するにも及ばない、と云ふて生花の本能を全然沒することも出來ないから假令嫌ひ花忌み花なりとも美感を損ねない範圍に於ては强て八釜しく云ふに及ばない筈である、だが禁花として居る穀類、死花、殘花の類、それから嫌ひ花として居る毒草、莿ある花は用ひぬがよろしからふ』と云ふ兩者の調和說との三つになつて居ります、從つて之れが斷案は容易に下すことは出來かねますが併し後者の調停說は最も穩當で然も現今では此の說に準じて挿けて居るのが多いようでありますから之れに據るが宜しいでせう。

花數と枝數

盛花は流儀花から生れたものとすれば其凡ての格は本來なれば流儀花に準ずべき筈でありますけれども、其格を破ると云ふのは畢竟花の體を異にして居るからのことで

ありますさすれば盛花の本意に差支への無い程度用ひ得べき程度に於ては盛花の格を襲用すべきは至當のことでありますですから此點に於て盛花に用ゆべき花の數或は枝數及び種類の數は何うかと云ふに之れが增減の爲めに盛花として何等の受けるところが無いとして見ると其凡ては無論流儀花に從ふべきであります。處で流儀花では其數に如何樣の制限があるかと申しますと、枝數、花數、種類(流儀花では應合として使ふ)の數は凡て偶數を嫌つて奇數を用ひることゝなつてあります、即ち三、五、七、九、十一の如き數を用ひ二、四、六、八、十の如き數を用ひぬことゝなつてありますが其內にも枝數或は花數に就いては時に苦しからぬとして居りますけれども種類は最も嚴しくする處でありますから盛花に於ても取合せの種類は勿論のこと、花は小輪物なれば兎も角大輪は努めて奇數を用ひるようにするがよろしい。

盛花の挿け方

以上述べ來つた處によつて盛花の內容は略ぼ述べ盡した筈でありますが然らば之れ

を生ける手順は何うだと云ひますと次ぎの通りであります。

▲**花器の整備**　花器は前に述べた通り平物に限ります、そして其使ふべき草木に應じて先づ花留を然るべき位置に置けばよろしい。

▲**置くべき場所の撰定**　生けた花を置くべき場所即ち床に置くべきか床脇に置くべきか或は西洋室の卓子の上に置くべきかの撰定でありますが、之れは前にも述べた通り其位置によつて挿くべき花の體に加減をせねばなりませんから挿くるに先つて最も肝要なことであります。

▲**配置すべき心組**　花の體を如何に挿くべきか、其配置を如何にすべきかと云ふ心組を先づ胸に畫くことであります、之れは本來なれば花器に花留を入れるに方つて成すべきことでありますけれども場所の撰定によつて更らに變るものでありますから第三次にしたのであります、そして愈よ斯ふと定まれば若し花留の位置を改める必要あれば直してよろしい。

▲**花の撰定**　以上のことが愈よ定まれば次ぎに豫め用意をしておいた花を撰りわ

けて其使ひ途を胸中で略ぼ定めるのであります。

▲第一枝　さて使ふべき花の撰定が終れば一番に挿すべきは云ふまでも無く天となるべき枝です、他の枝は此の天の枝を心として用ひるものでありますから此枝は是非とも最初に挿さねばなりません。尚念の爲めに天の枝とは前にも述べた通り總ての花の中で一番高く上に伸びる枝であります。

▲第二枝　天に次いで挿すのは地の枝(一番低く挿す枝です)であります、斯くして天と地の二枝を以て陰陽を定め次ぎに人以下の枝を心組のした通り添へとして漸次に挿すのでありますが其體は前に述べた通り不等邊三角形の中に納めると云ふた處で強て納めて仕舞はねばならないと云ふのではありません、其心持で挿せば宜しいのです。

▲整美　以上の順序で挿し終つたなれば全體の風姿が整ふて居るか否やと云ふことを一通り眺めて見るがよろしい、尤も生けて其場で眺めたゞけでは不可ません其場

で見て宜く出來て居る目算でも置くべき場所に据えて見劣りのすることもあれば又其場で邪魔になるように見えた枝も場所に据えて反つて一種の趣を添へることもあるものですから全體の組立てが終ると置くべき場所へ其まゝで据えて見ることです、そして日本室なれば流儀花と同樣疊を横に一疊離れて此方から、又西洋室なれば約一間ばかり離れて見るがよろしい其上で直すべき枝は直し切るべきものは切り捨てるようにせねば、生けあげた際に「之れは面白くない、此の花は今少しく此方へ」などと直して居つては後で「アゝ失策た、今の枝を切らなんだ方がよかつたかも知れない」と云ふやうなことが無いとも限りません。

日本室の盛花と西洋室の盛花

今一つ言ひ殘しましたが同じ盛花を挿けるにしても日本室に置くものと西洋室に置くものと區別をする必要のあることであります、何故なれば其光線の工合に於て又た室内の凡ての裝飾に於て全然異にしてをりますから夫れに用ひる盛花は各々其附近の

器物と相應して調和を計らねばなりませんですから日本式の室内に用ひる盛花は穏やかな風姿を以て色彩り餘りにケバ〳〵しいものは成るべく用ひぬがよろしいが西洋室には之れと反對に花葉ともに濃厚な色彩を撰ぶよう心掛けるがよろしい。

盛花の練習法

何事を志すにしても練習は肝腎でありますが併し盛花の練習は強ち草木を實地手にして俗に云ふお稽古をするよりも寧ろ精神上の練習の方が好果を得るものでありま す、と云ふて實地のお稽古は無論無くてはなりませんが………。

處で精神上の練習では何うするかと云ふに、盛花の本體とする處は既に再三述べた通り森林或は其他郊外の自然の風光を一器に描し入れると云ふにあるのですから平素から之れ等の風光を親しく見ぬまでも夫れを描したスケッチ或は古今の名畫に努めて接し、趣深きものや或は挿花として形れるものを常に腦裡に印しておくのは最もよろしい、そして草木を手にするに方つて其記憶を辿り細葉ある草木の枝を大樹に擬へ

數多き小輪の花を廣大な花園に見たて、此の花則に準じて挿して御覽なさい、其結果は幾度かの實地のお稽古より遥かに勝るものが出來るでせう、そして其記憶を辿りつつ花を挿す内に一種云ふに云はれぬ趣味の湧くものであります。

以上は流儀花と云はず投入花盛花等、凡て生花としての骨子を赤露々に述べたものでありますから花道に志そうとするには是れ以上の諸説を翫味するの要があります、そして夫れによつて手練を積むのは勿論でありますが夫れと共に最も必要なは水揚の方法であります、如何に體を調へた處で水揚法が不滿足であれば花には生氣がありません、生氣の無い生花は生花として見ることは出來かねる譯でありますから之れも花道には最も大切なことであるのは勿論です、尤も之れも秘事或は口傳などゝ申して各宗家では秘してをる處でありますけれども次ぎに夫れ等を忌憚なく申して見ませう尚前にも再三述べた通り生花は其法によるとは云ふものゝ夫れを活かすのは手練にあるよりも水揚法も花の持ち扱みや水の揚げ方等手練の如何によつて保ちの遅速は免れませんから今其方法を述べるに當つて此事を特に申し加へておきます。

第四編　水揚

草木養ひ方大意（用水）

凡て如何なる草木でも最も大切なは其養ひ方であります、如何に手際よく生けた花でありませうとも其養ひ方が整はねば折角の手の内も全然無駄骨となつて仕舞ひますから花を生けやうとすれば先づ其養ひ方から究めておく必要が是非無くてなりません。

然も草木の養ひ方に最も密接の關係ありますのは水であります、此の水を大別して天落水、河水、井水の三種としてありますが天落水とは雨水、河水と井水とは河の水と井戸の水であることは云ふ迄もありません、處で池や沼の水は此の河水の部に屬し又井戸水には其深淺による區別、或は汲みたての水と汲みおきの、水の別ちあることを心得ねばなりませんが之れ等を今一つ深く立入つて良否を述べますと第一に雨水のよいこ

とは別として次ぎに河水は流れの激しい處よりも澱んで居る河の水の方がよろしい殊に水草などは池或は沼の水、それも成るべくなれば生くべき花の出生に應ずべきは勿論であります、それから井戸水は早朝に汲むべきものとしておきますが併し其深淺により或は時季によつて冷かなと暖かいとの區別がありますから尠くも半日か一日汲みおいて用ひるがよろしい、そして其何れにしても惡水は不可ません、又雨水の貯藏法として斯道の一般に行はれて居るのは梅雨の頃に壺か瓶に雨水を受け入れ夫れに一塊の煤土を火で燒いたのを入れておけばよろしい、斯くすれば水は腐る憂ひがありません。

尤も以上は生花に用ゆべき水質だけを述べたものでありますが、併し之れを花器に使ふには必らず每朝取り代えるやうになさい、花器の水、殊に夏時は腐り易いものでありますから水が腐れば花も保ち難いものであります、又用ひるべき花器によつて水の保ちの遲速があります、即ち保ちのよい花器は錫或は陶器は一番ですが竹器或は木器の水は何うしても腐り易いものであります、ですから流儀によつては花器の底へ更らに

錫製の水入れを嵌めて用ひるものもある程であります。又未だ花器に入れぬ花を保たすにはいろ〱の方法がありますが最も手輕くして功果のあるのは井戸に下げおくことであります、即ち草花なれば根本を括つて逆さに、木なれば根本を釣瓶に入れて何れも井戸の水際近く釣り下げておけばよろしい。

草木養ひ方の大意（季節と水揚其一）

普通一般の草木は季節によつて其水揚げの方法が違ひますが之れを區別して眞行草の三様としてあるのです、即ち此の三様を擧げて見ますと。

眞の水揚げ法は陰暦の六、七、八の三ヶ月に行ふべきもので之れには一升の水へ艾を一合ほどと山椒一勺ほどを入れよく〱煮つめて八分目ほどになつた熱湯の中へ生くべき草木の根本を差し入れ切り口の白くなつた頃に冷水にうつし半日ほど入れおいて用ひるのでありますが、花葉に湯が浸つては勿論のこと、湯氣にあたつてすら花體を損じるものでありますから、根本を殘した外は竹の皮か何かに包んだ上で行へばよろ

しい。
行の水揚法は之れも三、四、五及び九、十、十一の六ケ月に行ふべきものでありますが之れは堅炭を強く火にして其上へ山椒を少しく置いて燻べ、生くべき草木の花葉をよく包んで根本だけを露はし、其上に翳して切口の火になるまで篤と焼き其焼けた處を切りすてゝ直ちに冷水につけて半日ほど置いた上で生けるのであります。
又草の水揚法とは十二、一、二の三ケ月に行ふべき方法でありますが此の季候は草木ともに發芽の折柄でありますから總體に生氣強く別段込み入つた手段をするには及びません只だ其用ゆべき水を河水か汲み置のものを以てすればよろしい汲たての水のよく無いことは前にも述べた通りでありますが殊に此の時季には汲たての水を用ひては宜しくありません。
以上は草木を通じての水揚法でありますが、尚其種類に應じて異つたものを次に項を改めて述べて見ます。

草木養ひ方の大意（季節と水揚其二）

前に述べた季節と水揚、即ち眞行草の養ひ方は一般的の方法でありますが、嵯峨御所流の未生派では聊か趣を異にして居ります、と云ふて大同小異ではありますけれども之れも參考でありますから次ぎに述べて見ませう。

眞の養ひ方は五月の夏至から八月の彼岸までの間に行ふべきものであります、此の期間に切つた花葉は水に浸しては不可ません、水を禁めて銅の薄鍋か或は行平へ水を八九分ばかり入れて充分に煮つめ熱湯となつた中へ切り取つた草木の根本を入れて湯の爲めに白くなるまで浸けおき、別に花桶か若し花桶が無くば普通の水桶或はバケツに然るべきほど冷水を入れ湯から取り出した草木の熱氣の冷めぬ内に成るべく手早く桶の中の冷水へ入れ三時間半ばかり其まゝで置いて生けるのでありますが、之れが夜分なれば一夜其まゝで置いて翌朝生けてもよろしい、ですが翌朝まで置くとすれば成るべく風の當らぬやうせねばなりません、それから今一つ大切なことは草木は出生

のまゝ桶に入れることで決して横にしては不可ぬことであります。
其の養ひ方は以上の通りでありますが前に述べた一般的のものと行ふべき月に於て、又た方法に於て多少異にしてをります、次ぎに行の養ひ方を擧げて見ますと次ぎの通りであります。
行の養ひ方は二月の彼岸から五月の夏至までと、八月の彼岸から霜月の冬至までに行ふべき方法でありますが此の春の養ひ方と秋の養ひ方に炭にも堅いと和かなと異にすることは何んでもないやうでありますけれども注意すべきです、即ち春の養ひには堅き炭を充分に火にし火鉢の灰を掘つて火となつた炭を其中に入れ四方の灰を篤とあたゝめて其火を取り出し(之れは灰を暖める爲めと且つは其使つた炭の火が消えかゝるものですから取り出すのです)又もや充分に火となつた炭を其穴の中へ入れて灰を四方からかけ、火の上を一寸二三分くらゐの周圍にあけ(あけた火の上に灰の落ちないやうにするがよろしい)夫れから火氣を強くする爲めと花の枝葉に成るべく火氣のかゝらぬ用意として火鉢の緣のところへは冷めた灰を布きます、と之れで用意の出來

たことになります、さて之れだけの用意が出來ますと水揚げをすべき草木は其根本を火の穴へ入れて充分に燒くのですが申すまでも無く枝葉に火氣のあたらぬやう成るべく注意をせねばなりません、そして燒けた頃合をはかつて取り出すと其部分を切り取り再び火に入れて燒くと云ふ工合に二三度繰り返して最後に根本を切ると其まゝ豫め用意をしてある冷水に入れて養ふことは前に述べた眞の養ひ方と同じ方法ですればよろしいのであります。

夫れから草の養ひ方は十一月の冬至から二月の彼岸までに行ふべき方法でありまして之れは前の季節と水揚其一に述べた草の養ひ方と格別の變りは無く汲みおきの水に浸けておくだけで宜しいのですが其水もザク〳〵するやうな氷つたものゝ方がよいと此流では云ふてをります。

嵯峨未生では以上の通りでありますが其功果は何れがよいかは方法よりも寧ろ行ふ人の手腕にあるのですから著者は何れがよいとも申しますまい、只だ試る人の如何にお任せをしておきませう。

尙念の爲めに申しますが以上記した季節は何れも陰暦でありますから彼岸、夏至、冬至等の暦日を目途とせられるがよろしい。

草木水揚法の大意

大抵の草木は前に述べた眞行草の養ひ方によつて水の揚るものでありますが併し夫れは畢竟通則とも云ふべきでありまして更らに其種類に應じて特種の水揚法がありまず、と云ふて生花そのものは技術でありますから方法を示した處で何人でも直ちに遺憾なく生けることが出來ぬやうに水揚法に於ても其通りであります、一定の方法によつて行ふのですから誰れがしても變りのあるべき筈は無いのですが草木を扱ふには僅かな呼吸によつて充分の結果と今一息面白からぬ結果に岐れるものでありますから茲に示す水揚法は或流儀の極秘から拔いたものでありますけれども之れを應用する其人の手腕によつて差違の生じるのは免れ難い處であると云ふことを申しておきます、と云ふて或者流のやうに秘傳或は極秘だから判然と書かぬと云ふやうなこと

は致しません、假りにも花道の道しるべとした本編では初傳極秘の別なく述べるだけのことは悉く包まず述べる筈であります、從つて之れを水揚法の定義として御覽頂いてよろしい、尚繰返して水揚法には定義以外の手腕が要ることを申しておきます、いや、手腕が無くとも定義通りに行へば必らず水は揚るものですが併し手腕の如何は時間問題であります、之れを約めて申せば初心の人が一種の花を生けて二日保たすものなれば手腕のある人は同じ方法によつて三日四日、時には一週間以上も保たすことが出來るものであります、そして其手腕なるものは到底口や筆を以て云ふことは出來ませず只だ生ける人が自然的に研究の結果、所謂云ふに云はれぬ内に覺えるのでありますから斯道に志す人は其心を以て自ら究めて御覽なさい。

草木水揚法の大意は以上述べた通りでありますが以下花道の極秘として居ます水揚法を示して見ませう、尤も之れは成るべく其季節に準じることゝ致しましたものゝ其内にも簡より漸次繁に入ることを主としました、夫れが爲め四季混交してをりますから其項目は卷頭の目次によつて御覽下さい。(以下の水揚法は特に禁轉載飜刻)

梅と櫻の水揚法

梅も櫻も其水揚の方法は別段變りはありません、其根本の切口を火にて炭になるまでよく燒いて其處を切りすて後へ泥を塗つて生ければよろしい。其内にも梅は生くべき花器に硫黄を一匁ばかり入れておけば尚更らよろしい。

菊の水揚法

菊も根本を燒いて逆水(切口を上にして逆さに持ち、其切口から水をかけることです)をかけ冷水に暫らく浸けおいて生ければよろしい。ですが根本を燒く際に注意をせねば花葉を損ずる恐れがありますから根本を燒く代りに沸湯の中に浸けて暫らく氣の洩れぬやうにしてもよろしい。

柳の水揚法

切口に油を塗つて焼くのが秘傳であります、又人參で煮込み夜露をとつて生けるとよろしいけれども併し此法では芽の少し出た頭には水は揚りません。

南天の水揚法

根本を少し焼いて焼いた部分を切りすて鹽を少し加へて混せた水に夫れを浸して暫らくおいた上で生けるのでありますが花器にも少しく鹽を入れておけばよろしい。

杜若の水揚法

石膏と唐辛子を煎じた汁で根本を煮上げて其箇所を切り去り冷水に入れて生けてもよろしいが併し充分に水を揚げやうと思ふには米の洗ひ水に鹽を混ぜたものに根本を浸しおき夫れを取り出して今度は清水へ玉子を二三個磨いたものを入れてよく掻き廻した汁に根本を充分に浸した上で生けると水のよく揚るのみでは無く花葉とも

に勢ひのよろしいものです。又一説には莖に小葉のあるところは節ですから之れを竪に少しく割り、そして生ける時には莖の根本を少しづゝ切りすてると花が永く保ち先の花が假令落ちたところで更らに一花開くものであると云ひます。

擅特の水揚法

之れを切るには早朝か暮方にせねばなりません、そして切り採つた枝は川芎(藥種屋にあります)の煎じ汁に根本を浸すのですが其煎じ汁は熱いほどよろしいのですから鍋へでも入れて充分に沸くがよろしい、そして煮えくちた處は切り捨て水深く生けるのであります。

水引草の水揚法

極く早天の露ある內に伐つて根をたゝきくだき油をつけて熱き灰の中へ燒けるほどまで差し込みおき燒けたところを切りすてゝ根本を一寸ほど割り冷水につけて生け

るのであります。

千日紅の水揚法

朝早く切つて根をたゝきくだき、熱き灰で燒くまでは水引草と變りはありません、それから根本を紙に包んで冷水に入れおき水の揚つたのを待つて後に生けるのであります。又或流儀では節を竪に割りて生けねば水が揚りかねて凋み易いと云ふてをりますが以上の方法を以てすれば其心配は無い筈です。

しんめい菊の水揚法

早天に切つて根を酒で長く煮て其煮へくちた處を切りすて冷水につけ、水の揚るのを待つて生けるのでありますが、萬一水のあがりかねた時は濡れ菰を土の上におき、其上に菊をおき、亦その上に濡れ菰を被せて水を充分にかけ、一夜其まゝに置けば水が揚るやうになります。

紫陽花の水揚法

朝早くまだ夜露のある内に切るがよろしい、そして根を熱き湯に暫らく浸けて冷水にうつし其上で生けるのであります、又夕方に切つた時には眞の養ひ方をして二時間ばかり冷水に浸けそれから夜露をとつて翌朝生けるのでありますが花は總體に日中に切ることを嫌ひます内にも殊に紫陽花は尚更らであります。

藪茗荷の水揚法

早天に切つて竹の箆で節をわり根を焼いて冷水に深く浸けおき水の揚るのを待つて生けるのであります。

「ごげう」の水揚法

之れは生くべき前夜に切つて根本を焼き鹽を水に溶かした中に浸けて一夜夜つゆを

取りその上で生けるのです。

慈姑の水揚法

慈姑の水揚は困難なものでありますが、之れは早朝に切つて竹のしべで切口から葉末まで通しぬき(此際最も注意すべきは切口から通す竹の先で茎の皮を破らぬやうせねばなりません)葉先まで冷水に深く入れおき、それから出して灰汁に根本を浸け、水の揚るのを待つて生けるのです。

ほとゝぎす草の水揚法

之れを切り取る際には豫じめ鬢付油の用意をしておくがよろしい、尤も伐るべき時刻は極早天でありますが切ると其まゝ用意の鬢附油を直ちに切口につけて持ち歸り、鬢附油を塗つたまゝで根本を焼き焼いたところを切りすてゝ冷水に深く浸けおき水の揚るのを待つて生けるのであります。

紫陽花の水揚法。薮茗荷の水揚法。こげうの水揚法。
慈姑の水揚法。ほとゝぎす草の水揚法

つわぶきの水揚法

之れも極早朝に切らねばなりません、そして熱き灰に二十分ほど差し込みおき取り出して根本を切りすて冷水に入れおいて後に生けるのです。

女郎花の水揚法

女郎花の切る時刻は强ち早朝には限りません、切り取つた莖の根本を鹽又は石膏、唐辛子に煮込んだ上、冷水で逆水をかけて生ければよろしい。

めと萩の水揚法

早出の『めと』萩は小枝の末まで水のあがりかねるばかりでは無く假令水が揚がつたところで夕方から夜にかけては葉が眠り裏を見せるやうになつて光澤を失ひ恰ど枯葉のやうに勢ひが失せ甚だ風情の無くなるものでありますから之れが水揚げは勿論扱

ひ方にも餘程大事をとらねばなりません、處で之れをぬかり無く水を揚げ且つ夜に入るとも變りの無いやうにするには前に述べた杜若の養ひ方のようにして夫れから草か菰に卷き、根本を水に入れ深い桶の中にて三四日養へば工合よく保つものであります。

味噌萩の水揚法

之れは前に述べた女郎花と同じことでありますから其法によつて水揚げをするがよろしい。

つも切り草の水揚法

之れもみ・そ・萩と同樣ですから女郎花の水揚法によるがよろしい。

石竹の水揚法

之れもつも切草と同じことであります。

撫子の水揚法

生くべき前夜に拵へをせねばなりません、即ち根本を切口から三寸ほどよく叩き砕いて鹽をつけ、火に焼いて焼きたるところを切りすてゝ冷水に浸し、一夜夜露をとつて翌朝生けるのであります。

茶山花の水揚法

根本を割りかけて生けるのでありますが、花器には鹽水を入れてよろしい、又た花器へ挿れるまでに鹽水で水を揚げさせ其上にて鹽水を入れた花器に挿せば尚更らよろしい。

芙蓉の水揚法

芙蓉を水揚げるには唐辛子の煎じ汁を極く熱くして其中へ芙蓉の根本を入れ湯氣を口から洩れぬやうに塞いで暫らく置きよき程を計つて冷水にうつして生けるのであります。

太藺の水揚法

石灰を水に溶かして根本を其中に暫らく浸し、水の揚るのを待つて生けるのでありますが花器に使ふ水は成るべく池沼等成るべく其出生に應じたものを以てすれば尚更らよろしい。

木蓮の水揚法

木蓮の水揚げ法は根本の切口を少しく割り、其中へ山椒の粒を挾んでおけば夫れでよろしい。

藤の花水揚法

根本に酒をつけて火で燒き汲みたての水で生けたなればよろしい。

卯の花水揚法

切る時刻は夕方がよろしい、そして根本を叩きくだき石灰をつけてよくあぶり冷水に生けてよろしい。

秋海棠の水揚法

極く早天に切つて節を割り根をやいて冷水に深く差し入れ、水のあがるのを待つて生けるとよろしい。尤も此の節を割るのは此の花は節が高くて水あがりのわるい爲めでありますそして其割り方は交へ違ひ即ち一節は右の方の節を割ると其次ぎは左りの方の節を割やうにするのであります。

萬年青の水揚法

萬年青は元來水あげをせずとも葉の痛むものではありませんが併し極寒の頃、大霜の朝などは朝日の出る前に霜をおかして切り取りそれを瓶に生けおく時は朝日が暖かな影を映す頃になると勢ひよく挿けてあつた葉が次第に弱つて折角の花體を亂すことゝなるものでありますですから之れを防ぐには霜のかゝつた葉は其まゝで切り取り霜……假令解けたりとも……を温き湯で葉を洗ひ、それをよく拭き取つて乾かし、其上で生けることゝすれば勢ひの變らぬものであります。

蒲英公の水揚法

たんぽぽの水揚げは先づ根本を揃へて一寸ばかりの間を煮へ湯に浸し冷水に移しかくて水の揚るを待つた上で生けるのであります、又一法として人參と唐辛子の二品で煮込み水に下して生けてもよろしい。

蒲の水揚法

生ける前晩に切るがよろしい、そして鹽と唐辛子を煮込んだ湯に浸けて一夜夜露をとり、翌朝生けると水がよく揚るものであります。

枇杷の水揚法

普通の水だけでも水の揚らぬことはありませんが、初心の人には困難ですから鹽水で生けるがよろしい。

桔梗の水揚法

早天に切るがよろしい、そして根本を熱き灰でよく〱焼いて焼けた箇所を切り取り冷水に入れおいて水のあがる頃を待ち、花器にうつして生けるのであります。

芍藥の水揚法

花によつては日のある内に切るのを嫌ふところから早朝或は日沒に切るのでありま

すが芍薬は早朝に切るがよろしい、日沒後切つては假令水が揚るとしても勢ひの弱いものであります。

さて此の水揚げ法は菊と同じことでありまして溜桶に養ひ、桶のまゝ一夜井戸に釣り下しておいて翌日生けるのであります、又花を長く保たせやうとするには右の水揚をして花器に移すに先きだち、花器の底に鐵粉を入れておくがよろしい、元來芍薬は鐵を一切嫌ふものでありますが、毒薬變じて薬となるとでも申しませうか花器に鐵粉を入れおけば花葉ともに長く保つのみでは無く其勢ひもよろしいものであります、と云ふて此の花は竹器を嫌ひますから之れだけは一切用ひぬやうになさい。

牡丹の水揚法

牡丹の性質は朝は元氣よくとも午後になれば萎るゝものでありますが、之れを晝夜ともに元氣よくもたすには先づ根を燒いて燒いた部分を切り取り水に浸けて水の揚るを待ち、井戸に釣し二日ほど置いて生ける時は決して萎れることはありません尤も花

器に酒を入れおくことを忘れぬやうになさい。

紅葉の水揚法

紅葉の水揚法は諸流ともに秘傳として居るところでありますが、最も手輕くて然も効果のあるのは根本の切口を十文字に切り割り其間へ山椒と唐辛子の粒を込めて生けたなればよろしい、又一法として明礬一匁に山椒十粒ほどの割合で煎じつめ夫れに根本を浸して花器に移すも宜しい。

照紅葉の水揚法

普通の紅葉なれば切るべき時刻に別段厭ひはありませんが、照紅葉は早朝に切るのが最もよろしい、そして水揚法としては一升の水に一合ばかりの鹽のにがりを加へたものを花器に入れ之れに生けたなればよろしい。

萩の水揚法

萩は萎れ易いものですから之れは是非早天に切らねばなりません、早天の露ある内に切つて根本を熱き湯の中に入れて沸き、煮ゐくちた處を切り、切つては又もや熱湯に入れ、再三繰り返して更らに煮ゐたゝせたところを切りすてゝ冷水に深く入れおき、花器には茶の煎じ汁を入れて之れに生けたなればよく水のあがるものであります。

芭蕉の水揚法

之れも早天に切らねばなりません、そして其水揚法は三升の水に三十粒ほどの山椒を入れよく〳〵煎じた湯を桶に入れ切り採つた芭蕉の根本を其中に浸けおき根本の煮ゐくちるを待つて其箇所を切りすてゝ花器に冷水を入れて生けるのであります。

葵の水揚法

之れも早天に切らねばなりません、水揚の仕方は根本を焼いて焼いた箇所を切りすてゝ切口から竹の篦で葉際まで突き通し、引き抜いたあとへ上より紙捻を差し込んで冷水

紅葉の水揚法。照紅葉の水揚法。萩の水揚法。
芭蕉の水揚法。葵の水揚法

に深く入れ、水の揚るをまつて花器に挿れるのであります、尤も中に差し込んだ紙捻は抜かずと其まゝに捨ておいてよろしい、之れが水の揚げる補助ともなるのであります。

水葵の水揚法

之れは切るべき時刻を撰びません、又根を焼くにも及びませんが併し矢張り早朝か日沒後に切るのは凡て草木の爲めに宜しいのですから出來得れば早朝にお切なさい。

さて其水揚げの仕方は明礬一匁と山椒十粒ほどとを充分に煎じた中へ根本をつけおき、生ける時には煮たゝせたところを切り取り冷水に浸けて花器に移せばよろしい。

すゝきの水揚法

一般の人から輕く見られて然も水揚げの六かしいのは薄であります、從つて單に薄と云ふたゞけでは格別人も氣をとめませんが併し生け方或は水の揚げ方によつて又た非常に上品に見ゐるものでありますから花道では此の水揚げを諸流ともに容易に傳

授をせぬことになつてをるほどであります。
さて之れを水あげするには極く早朝に切り取り三合の水に五勺の鹽の割合を以てよく煮へたゝせ、切り取つた薄の根本を其中に入れて湯の冷めるまで浸けおいて生けるとよく水のあがるものであります。

葉鷄頭の水揚法

切る時刻は別段差支へはありません、水揚げの仕方は根本を切り割つて其間に硫黄を挾み挾んで硫黄の抜け落ち無いやうに合せ目を針金で括つて烈火に入れ、よく焼いたのを其まゝ冷水を湛へた大盥の中へ横にねさせ、暫らくおいて根本の焼いた部分を切りすてゝ生けるのであります。

あづま菊の水揚法

之れも切る時刻を別段厭ひませんが成るべくなれば早朝がよろしい、水の揚げ方は根

本を焼いて其焼いた部分を切つて捨て砂糖水につけおくと水が揚りますから其上で生けるのであります。

夏菊の水揚法

之れは是非とも早朝に切るやうになさい、根本を酒で煮るか或は酒をつけて焼いても宜しい、尤も焼いた場合は其部分を切り取るのは勿論であります、そして其何れにしろ其まゝ冷水につけて水の揚るまで待ち其上で花器に移して生けるのであります。

擬寶珠の水揚法

之れを切るのは餘り早朝で無くてよろしい、と云ふて日の昇つたあとで切つては水の揚らぬものでありますから日の出る頃に切るが恰どよろしい其代り別段水揚げの方法として殊更ら行ふには及びません、切り取つたものを體を整へ清水に深く挿して生けると水はよく揚るものであります。

鳥かぶとの水揚法

之れは是非早朝に切るやうにせねばなりません、そして水揚げの仕方は根を叩き砕いて焼き其部分を切りすてゝ冷水に差し水の揚がるのを待つて生けるのであります。

糸櫻の水揚法

根本を切口から一寸ばかり削つて花器に入れても水は揚りますが、花器の水に大根おろしの汁を入れると一段とよく水のあがるものであります、尤も此の二つの方法を共に施したなれば尚更らよろしい。

椿の水揚法

椿は枝葉ともに其まゝでよく水の揚がるものでありますが只だ其花は甚だ脆いものでありまして落ち易いところから之れを生けることを忌む人もあるほどであります

が花の落ちるのをとめるには花の匂ひの中へ鹽を一つまみ入れるとよいことは前にも述べた筈であります。

若芽杜若の水揚法

若芽の杜若を切るには豫め硫黄と紙を用意しておくがよろしい、そして之れも早朝に切るのでありますが、切ると直ぐさま硫黄の花を粉にしたのを株にすり込み、紙に包んで持ち歸つたものを冷水に浸けおくと水が揚がりますから夫れを待つて生けるのであります。

芦の水揚法

之れは又他の草木と異つて夕暮れ、それも日の暮れる前に切り取るがよろしい、そして根本を熱湯につけ色が變つた部分だけを切つてすて別に一本の太き大竹の節を下だけ殘して芦の長さだけに拔き取り、其中に川芎と甘草(何方も藥種屋にあります)を煎じ

た汁に水を加へたものを注ぎ込み、之れに前の芦を葉先まで入れるのでありますが、如何に太い竹にした處で其中へ入れるとすると葉を痛める恐れが無いとも云はれません、ですから莖に葉を靜かに卷きつけて入れるやうなさい、そして約一時間ばかり其儘において花器に移せばよろしいのであります、尤も花器に使ふ水は芦の出生に應じて成るべく河水か池水を用ひるがよろしい。

百合の水揚法

百合にはいろ〳〵と種類はありますが、何れも此の水揚の方法によればよろしい。切るのには之れも時刻に差支へはありませんが矢張り早朝の方が生氣のあるものであります、此の水揚げも先づ根を燒いて燒いた部分を切りすて、冷水に浸して一方では花器に砂糖水を入れおいて夫れに生けると花も長く保ち勢ひも容易に弱らぬものであります。

山吹の水揚法

山吹も切る時刻に厭ひはありませんが、矢張り早朝がよろしい、前々から述べる通り草木を切るには或る特別のもの丶外は凡て早朝生氣のある内に切るのは最もよろしいものであります。

處で此の水揚げをするには柳を楊枝のやうに細く削つたものが要りますから夫れを先づ用意しておくがよろしい、尤も長さは餘り長く無くとも差支へはありません、それから藥水として水に酢を混じたものをよく雑ぜて之れも用意をしておくがよろしい。

さて其水揚法は切り採つた山吹の切口へ楊枝のやうに削つた柳を差し込み、それから其根本を藥水に浸し取りあげて生けると宜しいのです。

澤瀉の水揚法

水草類は概して水の揚り惡いものとして居りますが、其仕方を説けば比較的譯の無いものであります。

即ち澤瀉の水揚に於ても其通りでありまして切ると其儘出生地の水に切口を入れて

持ち歸り花器には泥水の澄みたのを入れて生ければ宜しいのであります。

しやくなぎの水揚法

石南花も流儀によつては隨分六かしいことを云はんではありませんが之れは米の洗水(白水)で生けるとよく水の揚るものであります。

朝顏の水揚法

朝顏は時刻によつて、切ると直ぐ萎むものでありますから之れは夕刻に切るが一番よろしい、そして生けるやうに體を整へ、其まゝ井戸の水際まで一夜釣るしておけば切つた際に假令萎みがあらふとも翌朝は勢ひよく生々として居るものであります。
尚之れを杖に卷く方法は草立て申して左卷きにするがよろしい、それで無く右卷きに卷きつけた時は假令水が揚るとも撚が戻つて花體の亂れる恐れがありますから注意せねばなりません。

細竹の水揚法

細竹は旱天に切らねばなりませんが、切るには豫め白粉を用意しておくがよろしい、そして切ると其場で切口へ白粉を塗つて持ち歸るのであります、それを忘れた時は間も無く萎んで仕舞ひます、いや、細竹に限らず總體竹類は萎み易い性質のものでありますと云ふて竹の凡てに白粉を用ひてよいとは申しません、他の竹は各其項に述べましたから御覽なさい、ですが茲には細竹として述べるにとゞめます。

さて持ち歸つた細竹は其根本を酒でよく煮た上で冷水へ深く入れおくと水の揚るものですから夫れから生けるのであります、又親竹の太い時には下から二番目の節の下の方へ錐で穴をあけ其處から燒酎を入れておけばよろしい、斯ふして水揚げをしたものは日々も長く保つものであります。

割竹の水揚法

竹は總體に水揚げの六かしいものとして居る内にも割竹は殊更ら困難なものとして居るのですが、之れも仕方を聞けば案外樂であります、と云ふて本項の當初に述べた通り、仕方は案外容易でありますとも其扱ひ方は手練が無くては充分ではありませんから決して油斷の出來ないのは云ふまでも無いことです。

處で之れを切るにも是非早朝、それも露のある内に切るがよろしい、ですが之れには細竹のやうに別段白粉をつけるには及びませんから切ると持ち歸つて水揚げにかゝればよろしい。

水揚げの方法は下の節の横へ穴をあけ、其穴から黒硫黄を水に溶いて夫れに鹽五勺に水一升五合の割合に合したものを煮湯として交ぜたものを入れ暫らく置いて根本を冷水に入れると水があがりますから竹を上から割つて花器に生けるのですが併し其割り方にも方法がありますから次ぎを御覽なさい。

竹の水揚げをして居る間に一方で明礬を水に溶いて用意をしておきます、さていよいよ生けるとなると竹を上から割るのですが割ると直ぐさま割つたところへ明礬水を

入れねばなりません、そして花器へ其汁をつけて生けるのであります。

孟宗竹の水揚法

之れも早朝に切るのは申すまでもありません。

其水揚法は先づやうを抜き其中へ酒に石膏を交ぜ、それに鹽を少しく入れたのをつめて古綿を栓とし、夫れを生けるのでありますが、又一法として節を抜いて阿仙薬（薬種屋にあります）を少しく入れ、水を切口まで入れて古綿で止めておいてもよろしい。

寒竹の水揚法

之れも成るべくなれば早朝か日没後に切るがよろしい、水揚げの仕方は烏かぶとを煎じて其中に根本を入れ、煮たてし後に根本を切つて生けるのでありますが烏かぶとを煎じた水は毒でありますから注意をして假りにも口に入れぬやうせねばなりません。

尚右の方法で水は揚がりますが夫れでも甘草の細末を水で溶いて時々枝葉に振りかけなさい。

大竹の水揚法

之れは是非とも極く早天……それも日の出ない内に切るがよろしい。
水揚げの仕方は下の節一つを殘して上から節を打ち抜き、其中へ鹽のにがり一合に水一升の割合を以て合はしたものを入れて生けるのでありますが、生けてから後も時々霧吹きで鹽水を枝葉に吹きかけてよろしい。

竹の水揚法

前に述べたものも何れも竹は竹でありますが、茲に特に竹と云ふのは眞竹のことであります。
眞竹を切るのも極早朝の日の出ぬ内に限ります。

此の水揚法は上等の茶を五勺ほど土瓶か或は然るべき湯沸しに入れ一升ほどの水でよく〳〵煮つめて七分目ほどになつたのを充分に冷して用ひるのであります。

小笹の水揚法

竹類の内で小笹は最も水の揚り悪いものでありますが、之れを充分に水揚げをするには酒一合の中に艾四匁、川芎四匁、水五合の割合を以て混せ合せ、之れを二合半くらゐになるまでよく〳〵煎じつめ其中へ小笹の根本を入れて煮つめて引きあげ、冷水に浸して生けたなれば水もよく揚り葉も容易に萎まぬものであります。

福壽草の水揚法

福壽草は人參を煎じて夫れで水揚げをすれば宜しい。

河骨の水揚法

水草中でも蓮と共に水揚げの最も至難なものとされて居るほどでありますから先づ其切り方から注意をせねばなりません。
河骨の切り方は秘傳として既に述べた筈でありますから茲には繰返して申しませんが夫れを切る時刻は無論早朝の日の出前で無くてはなりません、そして切るべき開き葉は始めに出た古き葉……申すまでも無く破れ葉や虫の喰た葉を避けて……に限ります、新葉を切ることは無用であります、そして切り取つたものは添竹をして井戸へ釣しおき（添ね竹の代りに紐でも差支へはありませんが併し紐では上げ下げの際に井戸側で磨つて花體を損じる恐れがあります）そして一方では藥水の拵へにかゝるがよろしい、其藥水とは明礬を水に溶けばよろしいのです、そして生ける際には水鐵砲の端を河骨の切口にあて、此の藥水を注入すればよろしい。

水仙の水揚法

水仙を切るのに時刻に別段厭ひはありませんが、併し成るべくなれば早朝に切るがよ

ろしい。

水揚げの仕方は先づ切口の袴を取つて唾にてひつゝけ、葉を拵へ花體を整へたあとで灰汁に根本を浸けおけば水は揚りますから其上で花器へ移して生ければよろしいのであります。

雨後の杜若

杜若の生けた葉色が麗はしく恰ど雨に濡れたやうな趣を見せるのでありますが之れは杜若を早朝に切り取り白砂糖を溶かした水で葉を磨いて生けると宜しいのであります。

魚柳の水揚法

之れも早朝に切つて水一升に鹽五勺の割合を以て溶かし、よく沸きたゝして柳の根本を其中に入れ、煮たゝらして湯と共に桶にうつし、湯がさめて水のあがるまで置いて生

けるのであります。
倘雨中の柳、雨後の柳、時雨の柳及び結び南天、菊の結び方等の水揚法は特種のものでありますが之れ等は初心者に要の無いことですから本編では申しますまい。

さぎ草の水揚法

切る時刻は何時でも厭ひませんが矢ッ張り早朝がよろしい。
水の揚げ方は切り採つた根本を温茶に暫らく浸して生けるとよく水の揚るものであります。

孔雀草の水揚法

早朝日の出ない間に切りとつて小桶に株を入れ、其中へ煮へたちし湯を入れて冷めるまですておき生けるのであります。

錢葵の水揚法

切る時刻は何時でも差支へはありませんが、それでも早朝か或は日没後にするがよろしい。

水の揚げ方は根本を焼いて更らに湯に浸し焼いた部分を切り取つて水に下して生けるのであります。

野菊の水揚法

銭葵と同じことでありますから其通りになさい。

貝母の水揚法

之れも銭葵と同様であります。

美人草の水揚法

之れも前と同じことであります。

木船菊の水揚法

之れも前と同じことでありますから其項を御覧なさい。

虎の尾の水揚法

之れも前と同じことであります。

櫻草の水揚法

之れも前と同じことであります。

鳳凰草の水揚法

之れも前と同じことであります。

なごうこの水揚法

之れも前と同じことであります。

煙草の水揚法

之れも前と同じことであります。

金雀花の水揚法

之れも前と同じことであります、又一説には根本を叩き砕いたゞけで花器に土殷孽の粉を少しく入れるとよろしいと云ふて居ります。

要するに錢葵以下の十一種は何れも水揚法は同一でありますが殊更項をわけて別々に記したのは甚だ愚念のようではありますけれども目次の索引に便ならんが爲めに外ありません。

しのぶの水揚法

荵は割合に水の揚りやすいものではありますが代りに又萎みやすいものでありますから持ち扱ひに注意が肝要であります。處で此の水揚の仕方は胡麻の油を水に少しく加へてよく混ぜ合したものに根本を浸しよく／＼吸はせて生けるとよろしい。

蓮の水揚法

蓮の切り方は河骨と共に前に述べた筈でありますが右は一般に稱へられて居る處でありまして其結果も惡くは無いにしろ云はゞ正式のものと申すわけには參りません。由來蓮の水揚は花道の內でも最も至難のものでありまして門戶を張つて居る相當の宗匠すら……いや多年斯道に親しんで居る人ですら常に苦む處であります、と云ふて丸きり水が揚らぬと云ふのでは無く長く保たすか否かの問題であります、尤も花の性來は早朝に蕾を開いて晝ごろまで其まゝで持ち晝すぎる頃から花瓣が次第に閉ぢて夕刻には蕾のやうになつて仕舞ふのが一日目、それから翌日は又もや早朝に開きま

すが今度は晝すぎになつても閉ぢる力が無く開いたまゝで二日目をすごし、三日目からは花瓣が次第に散るか或は勢ひのよいものは變色を來すかですけれども夫れは稀で大抵は散つて仕舞ふものでありますから約まり花の壽命は正味二日であります。

次ぎに葉には浮葉、卷葉、開葉の三種にわけることが出來まして浮葉とは餘りに大きく發育をせず、小さいながらに開くことは開くが上に伸びずに水上に浮んで居るものであります、それから卷葉とは云はゞまだ幼稚なる葉でありまして莖の先に附いたまゝ水上には出て居りますが開くに至らず横から見ると恰どイ字形をなしてをります、又開き葉とは既に成長して水上に高く開いて居る葉のことであります、そして生けるのには之れ等の葉を取り合すことは生方の項に述べた通りでありますから茲には申しませんが併し此の葉は水揚の如何によつて一週間も十日も持たすことが出來るのであります、ですから水揚の巧拙は此の葉の長く保つか何うかによつて別れるのでありますと云ふて花も盛りは二日とは云ふものゝ實が殘りますから此の莖も生氣を失せては不可ません、いや葉を旨く保たすほどなれば水揚げの法は同一ですから花の莖も

持つ筈であります。
處で其水揚法はと申しますと先づ伐り採る方法から心得ておくが宜しい、即ち蓮を伐るには早朝成るべくは花の開かぬ時刻に越したことはありませんが已を得ねば強ち夫れで無くとも日の出前なればよろしい、そして伐り採つた花の生氣を保たしめる爲めに底に泥を入れた花桶を豫め用意をして花或は葉を伐るに從つて直さま其切口を桶の底の泥へ突つ込まねばなりません、さて入用だけを切り終れば早く持ち歸つて之れから愈よ水揚げに取りかゝるのです。
水揚げに入用の藥品は明礬があれば夫れでよろしい、明礬と水を煮たてた熱湯の中に蓮の根本を入れ煮たゝれたのを取り出して切りすてると又もや夫れに浸け之れも取り出して切り捨てると云ふ風に再三繰り返した後冷水に入れて今度は井戸の中へ暫らく逆さに釣りおいて生けるのであります。
尙之れを行ふに就いて念の爲めに云ふておかねばならぬのは明礬の煮た湯に根本を浸ける際其湯氣が葉や花にかゝらぬやう注意をすることが肝要であります。

ダリヤの水揚法

ダリヤの水揚も蓮と同様困難なものとされて居りますが其水揚法としては花を伐り取らぬ前に先づ一升の水に約五勺ほどのニガリを入れて鍋或は金盥に入れて火にかけ、人體の皮膚に耐え得られるほどの温度とすればよろしい、そして此の支度が調へば花を伐り採つて恰好を拵へ花葉は火氣の當らぬように葉蘭か何か然るべきものを以て包み根本を薬湯に浸けて一時間ほど置き、湯からあげたのに逆水を注ぎ、今度は冷水に挿して二時間ほど養つた上で花器に移せば立派に水のあがるものであります。

生花の手引 附投入盛花 終

發賣所　岡田文祥堂
振替口座大阪五二二八番
電話本局三二九八番

ダリヤの湯揚法

ダリ

取ら

けた

花を

て包

に挿

生。

大正六年二月二十日印刷
大正六年二月廿七日發行

生花手引奧付
定價金四拾錢

不許複製

著作者　花道研究會編
大阪市東區北久寶寺町四丁目十五番地ノ一
發行者　岡田菊二郎
大阪市西區南堀江二番町一番地
印刷者　堀越幸

發賣所　岡田文祥堂
大阪市東區北久寶寺町心齋橋通西入
振替口座大阪　電話本局　三三二九八番